

あ
き
た
の
文
芸

第五十八集

あやたの文芸 第58集 目次

●小説・評論

● 奨励賞

● 海辺の補助輪

● 跡部佐知

●詩

● 奨励賞

● 空如一聲なきものに筆を向けて

● 高橋岑

● 短歌

● 奨励賞

● 月見草の花言葉は

● 悠花仁夫

●俳句

● 奨励賞

● 堀井敏男

● 高橋岑

●短歌

● 奨励賞

● 堀井敏男

● 高橋岑

●短歌

● 奖励賞

● 母終戦八年
母への手紙

● 佐鈴一

●俳句

● 奨励賞

● 合掌

● 柳原知可子

●俳句

● 奖励賞

● 豊饒

● 岸部吟遊

●選評

●最優秀賞受賞のことば

グリーン賞
入選
奨励賞
奨励賞
最優秀賞

バスを買う
お見送り、そしてお出迎え
糸

跡 鈴木 修
部 佐 知
一

入選
奨励賞
奨励賞
奨励賞
最優秀賞

迷界吉祥
続編をつづる
晩夏
小松 隆義

鷺谷凡葉

和菅荒三岩
田原木浦谷
浩小千隆
仁洋洋菊両史

グリーン賞
入選
奨励賞
奨励賞
最優秀賞

仁王尊
掛唄
成高富
田橋野
伊雄三
吹子千
佐々木成

佐々木阿
佐々木
由紀子
佐々木亮
子

佐藤三浦
木井浦
佐憲市
ただし佳
豊

●あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

74

●あきた県民文化芸術祭2025「あきたの文芸」応募状況

73

エッセイ 川柳 俳句 短歌 詩 小説・評論

渡山佐古保石
辺崎藤澤坂倉
如茂りつ英
修醉樹世葵

菅伊泉加前尾
原藤屋藤田崎
敏光おさむトシ子
紀愁むち子勉奈

畠近加熊堀岡
山藤藤谷江
たつお昭子
研すが子沙オリ
英里奈

小說 · 評論

小説・評論

奨励賞 海辺の補助輪

秋田市 跡 部 佐 知

季節の変わり目に吹く涼風は、人を寂しくさせる。

おばあちゃんが亡くなつたときも、涼しくて、人肌恋しい風においがした。薄暗いワントームで一人、耳に押し当てたスマートフォン越しに、おばあちゃんの一生懸命出している声が空気を震わす感触はもう思い出せない。ずっと心のどこかに穴が開いたような感覚が拭えないまま、気づけば一年が経つていた。

確実に、十九歳のわたしは大人に近づいていた。

小学生のころは友だちがたくさんいて、明るい女の子だった。図書室なんて行かずに、それこそ鬼ごっこやケイドロをして走り回るのが好きで快活な子どもだったはず。中学生になつて、名字が立村に変わつたころから、友だちがいなくなつた。

がひりひり痛む。次第に、自己紹介のときに名字だけを名乗るようになつていった。新しい名字を好きになるため。周囲から見られる自分を演じていくために。親がくれた、葉から始まる下の名前に対しては、名字を名乗る度に違和感が膨らんでいた。

人はわたしから離れていた。正確に言えば離れていたというよりも、小学生からの友だちは、名字が変わつたわたしへの接し方がわからなかつたのだと思う。

中学、高校と孤立していたけれど寂しくはなかつた。図書室に行けば、学校よりも広いお話の世界があつて、あの空間の本でさえ、きつと一生かけても読み尽くせない。学校では、楽しんでいる人も、そうでない人も、みんな平等に時間が流れる。同じ授業を受けて、給食を食べて放課後を迎えるだけ。能動的に勉強しても、受動的に学んでもいい。何か極端な成果を求められているわけではないのだから。椅子に座り、じつとして授業を受け、昼休みには図書室に行つた。

休日は友だちと遊ぶ代わりに、おばあちゃんとよく遊んだ。図書館に連れて行つてもらつたり、ターミナル駅にある書店で本を買つ

しなかつた。海に入らなくなつたのはいつからだろう。泳ぐのは楽しいはずなのに、砂浜を踏み、海辺をぶらつくだけで満足するようになつてしまつた。

大人になるとはそういうことなのかもしれない。昼休みにドッジボールや鬼ごっこはしない。海だつて見るだけで満足できる。自分の体を少しづつ省エネに切り替えて、次の世代へと命を繋ぐ準備をする。無意識に、でも確実に、十九歳のわたしは大人に近づいていた。

小学生のころは友だちがたくさんいて、明るい女の子だった。図書室なんて行かずに、それこそ鬼ごっこやケイドロをして走り回るのが好きで快活な子どもだったはず。中学生になつて、名字が立村に変わつたころから、友だちがいなくなつた。

わたしは福島にある海の見える町で育つた。開発された丘に建つ一軒家からは、広大な太平洋が一望できる。天気がいいときには、大きな石油タンクーやフェリーが見えた。小学生くらいまでは、海に連れて行つてもらつて泳ぐのが大好きだった。潮でべたつく手触りも、水着で肌が露わになるのも気に

でもらつたりした。お昼には、お寿司を食べさせてもらうことが多かつた。おばあちゃんは、わたしの住んでいた町よりもずっと山間にの方に住んでいたのに、列車を乗り継ぎ、最寄り駅までいつも迎えに来てくれていた。

の文化センターに行こうと誘われたことがあった。おばあちゃんからどこかへ行きたいと言いくのは珍しかったから、二つ返事で了承した。

「そうでしょう。まあちゃんは生け花習つて
るの」
「そうなの? 初耳なんだけど」
「これを見て、『らん』」

おはあちゃんと会わない日でも、一人で図書館へ行つた。仕事休みのお母さんに、延々

とお父さんの悪口を聞かされたのが嫌だったから。二人が離婚した理由は性格の不一致らしいけれど、離婚すると言い出された小学

いて、それらしいことはほとんど覚えていない。あるとき、雷が目の前で何本も落ちたようだ、家が壊れてしまうと思うくらいの大喧嘩があつたことだけはうつすら覚えている。

おばあちゃんは、わたしの話をちゃんと聴いてくれる人だつた。

悩んでいると告げれば、どうしたの？ と必ず耳を傾けてくれて、相談すると話の助言をするのではなく、対等な目線でいつしょに物事を考えてくれる人だつた。だからわたし

高校一年生のころ、おばあちゃんから郡山

「おばあちゃん。今日はなんでもわざわざ郡山段を駆け上がつた。

「まで行くの？」
「まあ。ちょっとね」

「うん？」

幾はぐか不安を感じていたものの、これ以
ては上問いか詰めてもばつが悪かつたから、なるだ
け気にしないようとする。

電車に揺られることおよそ二時間。ようやく着いた郡山には、大きなビルとアーケード

が目立つ。二人で文化センターまで歩いた。

「生け花つて初めて見る」

動かない花を見つめながら、隣にいるおばあちゃんに声をかけた。

「そうだねえ」

おばあちゃんは口数が少ない。友だちと見に行かないのだろうかと一瞬思つたが、まずわたしが人のことを言えないのに気づく。わたしが高二になつてから、おばあちゃんは終活という言葉を口にするようになつて、大切なものを引き継いだり、今日のように生きた証を見せたりするようなことが増えた。

生け花を見たあと、郡山でもお寿司を食べた。山間部なお寿司がおいしいのはどうしてだろう。

おばあちゃんと長い時間いつしょの電車に揺られることは少なかつたから、あの日、車内で話したことはやけに色濃く残つている。山間を抜ける電車を乗降する人はまばらで、木々の隙間に茜色の空が見えた。

「今日も楽しかつたよ」

「うん」

どういう風に言葉を紡げば気持ちが伝わりやすいのか、しばらく考え込んでいた。その沈黙は妙に長く感じられて、そわそわと心が落ち着かなかつた。

「あのさ。いつもいつしょに付き合つてくれてありがとう」

おばあちゃんは何も答へなかつた。

パチパチ、と小枝が車両に当たる音と、レールをガタガタ揺らす音が耳たぶを優しく揺らす。

「おばあちゃんは、最寄りで降りなよ」「一人で帰れるの？」

「もう高二だよ。子どもじやないから電車なんて楽勝だよ」

おばあちゃんは山間の駅で降車した。わたしの最寄り駅まで送ると言つていたが、それだと帰りは日が落ちきつてしまつて危ない。

生け花に連れて行つてくれた日を皮切りに、おばあちゃんへの感謝を言葉に起こして伝えるようになつた。態度から生じる愛情と照れ隠しを、わたしひはしつかり感じ取つていたのだ。代わりに、わたしは言葉を返した。

会つたときには必ず、今日はありがとうと伝えた。

高校三年生の冬。大学に合格して秋田に住むことになつたのをおばあちゃんへ告げると、まず学費と生活費の心配をしていた。お父さんが払つてくれると伝えると、安堵した

ようで表情筋が緩んでいた。

両親が離婚しても、わたしはお父さんと連

絡を取つていた。お父さんは私のことを考慮して、国公立なら学費と生活費を出してくれるそうだ。お父さんが金銭面を支えてくれるというのは、お母さんも知つてることなのに、それでもお父さんに対する悪口は止まらなかつた。ここを出れば、いまよりも心落ち着いて暮らせる、そう思つていたから、引っ越しの日が待ち遠しかつた。

月に一回、おばあちゃんに向けてお手紙を書いた。引っ越しのときに、お野菜や缶詰、日用品のぎつしり入つた小包を送つてくれて、そこにはメモ書きが入つていた。

〈貰いものもあり悪しからず。タオルは洗濯してあります。一万円入れておきます。いつか秋田に伺いますよ。四月二十五日 ばあちゃんより〉

筆脈が揺らいでいる。おそらく手先が言うことを聞かず、満足に字も書けないのだろう。わたしがお手紙を書いても、返事はいつも電話で届いた。字を書くのが大変だという話は何度も聞かされた。

おばあちゃんは、頑張つてとは言わないけれど、密かにわたしを応援してくれていた。

口にしていた。思えば、それは会いたいといふことを暗に意味していたのかもしれない。

でも、当時のわたしには案内できる場所も大

学の学食くらいしかなかつただろし、紹介できる友だちもいないしで、来ても逆に不安

にさせてしまうだけだつたとも思う。そして、むしろわたしから万障繰り合わせてでも会に行くべきだつた。一度でいいから、大学生になつたわたしの顔を見せるべきだつたのだ。

おばあちゃんが望んだいつかは、一生訪れることのない時間になつた。

昨年のお葬式のときにぎやあぎやあ泣いていた家族は、それぞれ楽しそうに暮らしているらしい。親戚もみんな泣いていたのに、わたし一人だけは泣けなかつた。

おばあちゃんが死ぬ前に、一番長く時間を過ごしたのはわたしだ。一方で、長く時間を過ごしてきたからこそ、新鮮な会話をしてきた。愛されていることを理解し、わたしの気持ちを言葉にしていた。秋田に来させてあげられなかつたことや、大学生になつたわたしを見せられなかつたことは後悔している。それに、もしわたしが福島に住み続けていた

ら、もつと早く孤独死にも気づけただろう。いや、継続的に会い続けていたら、死ぬこともなかつたのかもしれない。

あれから一年経つというのに、まだうまく笑えない。

周りの学生のように道をうまく歩けない。好きなものは、好きだつたものと成り果て、かわいいもの、おいしいものにときめくことがなくなつた。

しかし、無気力なくせして心臓の鼓動は鳴りやまず、日々を刻んでいる。大学には、義務感と責任感だけで通つていて。通学できなくなつてしまつたら、合格を喜んでくれて、悩んでいた中学時代、高校時代のわたしに寄り添つてくれていたおばあちゃんに申し訳なかつた。

中高で同年代の友だちを作つてこなかつた反動で、おばあちゃん以外との接し方がよくわからない。新入生オリエンテーションの日も、講義でグループワークをしたときも誰とも仲良くできなかつた。大学二年生になつて、少しは既存のグループが変化するかと思えばそんなこともなく、既に仕上がつた友だちの輪のままだ。

それに、ご飯を作つたり、掃除をしたり、洗濯をしたりするのも、生きる限り一生続けなければならない。そう考えると憂鬱になつた。脱衣所に洗濯物の山ができる。シンクには昨日の洗い物が溜まつていて。それで大学に行かなくてはならない。おばあちゃんが死んだときも泣いていなかつた奴が、いまになつて「やっぱり悲しかつたんですね」だなんて言えるわけもない。強がりなハートといじらしさが、変なところで目立つっていた。

夏休みも終盤の九月。課題も終わつてやることがなくなつたあるとき、海に行くことにした。小さいときからずつと近くにあつたから、海が好きだつた。お昼時だつたため、冷蔵庫の中を開けてみたが何もない。学校は休みで気を紛らわすものもなく、思考する時間だけが増え、張りつめた心身はもう限界だつた。眠りたいのに寝つけず、白んできた空と共に、質の悪い睡眠に落ちる罪悪は寝ても覚めても拭えなかつた。海に救いを求めていた。

秋田駅で羽越本線の岩城みなと駅までの切符を買つた。四百二十円だつた。九月の暮れ

の北東北は、ほんのりと涼しい。半袖のポロシャツの上に、薄手の上着がほしくなるくらいに。

高校生のころは毎日のように電車に乗つていたのに、秋田で電車に乗つたのは初めてでどこか懐かしくなる。海のある方角から日の光がひゅんと差し込んできた。日本海は本当に日が沈むらしい。ワンマンカーでの降車に手間取り、運転士さんのいる前方の車両まで駆けたのが恥ずかしかつた。

電車を降りた途端、潮鳴りに襲われた。ごうごうと、自分の背のほうで波しぶきが鳴つていて。振り向くと、海面がきらきらと揺れていた。

ピンク色の駅舎を出て、右側にある階段を下ると和風な通路があつた。若干地下通路の様式をしているそこに足を踏み入れた途端、靴底にじやりじやりとした砂の感触。同時に、じとじとした海のにおいがした。通路を出て左に進み、高架の下をくぐると道の駅が見えた。道の駅に着いても、温泉やレストランには目もくれず、ひたすら海の方へと足を動かした。

建物の後ろ側、コンクリートの階段が砂を

被つている。階段を下ると、小汚い砂浜が広がつていた。異国の言葉の書かれたペットボトルや、プラスチック製のがれきが多く転がっている。白い流木にハンドバッグを置き、

海へ向かつてゆつたりと歩いて行つた。海にほど近い色の濃くなつていて砂浜で、ボトルメールや綺麗な貝殻を探したが見つからなかつた。輝く海を見て、うるさいくらいに鳴つている潮騒に包まれていると、徐々に五感は遮断されていく。波を見て、潮鳴りを聴き、風のにおいを記憶するだけ。

空はオレンジが濃くなり、潮は少しずつ満ちてきた。バッグを置きっぱなしにしていた流木は、数百メートルは遠いところにあつた。波打ち際を歩いているだけで、あつとい

う間に時間は過ぎていたらしい。ハンドバッゲの隣に、黒いトップスを着た人影がある。その人は、海の方を見ていた。波風に揺れる胸下まで伸びた金髪は、夕陽を反射して水面のようすに輝いている。どぎまぎしながらも、白い流木に向かつて歩き出した。

近づいて目にした彼女は、わたしよりも四、五歳は大人に見えた。ふつくらとした桜色の唇に、雪原のように白い肌。黒い半そで

のニットも似合つていて。

自分のバッグを手に取る前に、彼女へ一声かけた。

「すみません。これわたしのバッグで」

海を見ていた彼女は、急にわたしに話しかけられて驚いている様子だつた。

「あ。こちらこそごめんなさい」

「バッグ、見ててくれたんですか？」

「うん。海見るついでに」

見かけは派手だけれど、優しい人なのだと思つた。

「ありがとうございます。では、わたしはこれで」

「待つて。もうすぐ夕陽が落ちるところだから、座りなよ」

とんとん、と流木の上を撫でた。無言で、彼女の隣に腰掛ける。潮風に混じつて、花のようすが優しく香りがした。

「ここにはよく来るの？」

「いえ、初めて來ました」

「そつか。私は近くに住んでるからさ、ときどき来るんだ」

「海には、何をしに来るんですか？」

「バランスを取りに来る。人の作ったものば

かり目にしているとね、自然なものを見たくなるときがあるから」

「バランスですか？」

「うん。バランス。会社でパソコンの画面見てるからね。休みの日くらい自然な青を見たくなるんだ」

働いていることと、一人の時間を嗜んでいることに小さな憧れを抱く。

「君は？」

「わたしは、その」

自分のいまの心情を言語化できないでいた。言葉に起こせば、気持ちが言葉に上書きされて、ふわふわとおぼつかない足元を掬われそうだった。

「ちょっと。海、見たくなつて」

「ふーん」

海に夕陽が落ちていく。遠くを見つめる彼女の横顔。長いまつ毛が輝いている。見知らぬ人をして、急に心の穴が大きくなつて、気づけば大粒の涙を流していた。大丈夫? と声をかけて、背中をさすてくれた彼女のしなやかな金髪と、わたしの涙がきらきらと光っていた。

気づけば、声を詰まらせながらも、名も知

らぬ彼女にいきさつを話していた。名字が変わったこと、おばあちゃんと仲が良かつたこと、そのおばあちゃんが亡くなつて、一人でここに暮らしていること。いつもどこかに帰りたいのに、どこに帰りたいのかわからなくて、帰る場所も、わたしを待つ人も、もうどこにもいないこと。

優しく相槌を打ちながら、大変だつたねと共感し、目線を合わせ、想像を膨らませていつしょになつて考えてくれた。ゆつたりと話を聴いてくれる態度に、おばあちゃんのこと思い出す。夕陽が沈み、あたりが暗くなつたころには、泣き止んで冷静になつていた。

「あの階段上ると、お店とか温泉あるから少し休もつか」

無言で頷き、彼女が指さす方について行つた。彼女は、時折わたしのほうを振り返り、心配そうな目で見つめた。時刻は既に十八時。わたしたちは道の駅の休憩所に入つた。

「何か飲む?」

「え、悪いです」

「いいの。遠慮しないで」

「すみません。じゃあ、お茶でお願いします」

「私は缶コーヒーにしよう」と

ピットと音が鳴つてすぐ、ガタガタと飲み物の落ちてくる音がした。泣いたあのの酷く乾いた喉に、冷たいお茶がよく染み渡る。

「秋田市から来たんだよね」

「はい。電車で来ました」

「じゃあ、十九時くらいの電車あるからそれに乗つて帰つたらしいよ。電車の時間まではいつしょにいるね」

「ありがとうございます」

ブラックの缶コーヒーを一口飲んで、彼女が言つた。

「私も母子家庭だからわかるところもあるよ」

自分の話ばかりしていたせいか、彼女の話を聴けていなかつたことに気づきはつとする。

「うちの母親も別れた父親の悪口ばっかり言うしさ。あいつらから半分ずつ血を引いてる子どもにとつて、母親の愚痴つて私の否定なんだよね」

「わかります。だから、親のことを好きになれなくて、自分のことも大切にできなくて」

「だよね。でも、生まれてきたからには必死

に生きるしかないんだよ、やっぱ。大切なものがなくなつても、また新しい大切なものと

か作つて」

似通つた感性を持つてゐるのに、彼女はわたしのように氣を落としていなかつた。眼光は鋭く、生きる活力のようなものをひしひしと感じる。缶コーヒーは空になつた。コーヒーを飲めないわたしには、彼女がとても大人びて見えた。

駅まで送ると言つてくれたから並んで歩いた。ピンク色の駅舎を照らす外灯には、羽虫がたくさん集まつてゐる。夜の潮騒は仰々しくて心細い。彼女は、乗車駅証明書の取り方を教えてくれた。帰りそうな彼女を引き留めるように言葉を選んだ。まだもう少しいつしよに話をしたかつた。

「また会えますか」

「土日の夕方は大体海にいるよ」

そのとき、頭の中のスケジュール帳に予定が書かれた。夏休みの最後の週の土曜日はまた海に行こう。

「あと、お名前聞いてもいいですか」

「いいよ。雪つて呼んで。君は？」

「立村です」

「素敵な名字じやん」

このとき、下の名前を聞かれなかつたことと、素敵な名字だと褒められたことが嬉しかつた。まもなく下り列車が参ります、という接近放送が鳴つた。放送に負けないように少し声を張つて、彼女に向かつて最後の質問を絞り出す。

「どうすれば、前向きになれますか」

駅のホームに立つ前下がりボブの黒髪が、波風に押されではためいた。

「もう前向きになつてるとと思うけど、また来週いつしょに考えよう」

電車に乗つたわたしに手を振つてくれた。

下浜という駅で、海から帰つて來たのであらう女子高生たちが乗つてきた。新屋では、

高校生たちがたくさん乗車して、一気に人の密度が濃くなつた。暗くて味気ない風景と、高校生たちの話し声の中に、場違いな大学生の自分が浮いてゐる。

電車に揺られながら、会つたばかりの見知らぬ女の子に、こんなに優しくしてもらつていいのだろうかと思いながらも、来週の土曜日をどこか心待ちにしてゐる自分がいた。生きる理由と居場所が一つずつ増えたのが嬉しかつたのだ。

土曜日の昼下がり、再び電車に乗つた。今度は一号車に乗つて、降りるときに手間取ることもない。連絡先も交換していないのに会えるかが不安だつたが、道の駅の裏側にある長い階段のところに彼女の姿があつた。何やら、海に向けて画用紙でできた手のひらサイズのカードを掲げている。足音に気づいたのか、手すりにもたれて海を見ていた彼女が振り返つた。

「立村ちゃん、こんにちは」
「こんにちは。一週間ぶりです」
「先週会つたときよりいい表情しててる」
「そうですか？」
「そうだよ」

彼女は白いサンダルを履いていて、灰色のパーカーを羽織つていた。いつしょに、隣の手すりにもたれるようにして海を見た。

「綺麗ですね」

「天気もいいし、風は涼しいし。なんか落ち着く」
手に持つていた白いカードを、今度は青空にかざしてゐる。そのカードには穴が開いていて、向こう側の風景が見えた。

「それ、なんですか？」

「これのこと？ 切り絵って言うの。ほら。

こうして好きな風景にかざすとね、女の子の
髪色が変わるんだ」

よく見ると、カードに空いた穴の左側には
目をつむつて微笑んでいる女の子が描かれて
いて、穴の形もふわりと広がるロングヘアに
なっている。青空にかざされた女の子の髪は
群青色に染まっている。

「すごい！ とってもかわいいです」

ついテンションが上がってしまった。何か
をかわいいと感じたのは、かなり久々のこと
だった。

「ありがとうございます。私切り絵が趣味でき、今日立
ちちゃんが来たら渡そうと思つてたの」

「いいんですか？」

「全然いいよ。むしろ貰つて」

わたしは何かを貰つてばかり。いつか、雪

さんに何かを返したい。それか、誰かに何か
を与えられるような人間になりたいと思つ
た。

「風景に切り絵をかざすとね、少し元気にな
るんだ」

試しに、太陽の光で輝いている水面に、白

い画用紙でできた切り絵を重ねる。艶のある
さらさらな髪の毛のように見えるのが美麗
だ。

「ほんとだ。なんかわくわくします」

「でしょ」

切り絵の中の女の子は、植物に重ねれば華
やかで彩りのある髪になり、コンクリートに
合わせれば大人らしいシックな髪色になつ
た。どんなものにかざしてもかわいく映つ
た。

「温泉から眺める夕陽はすごいんだよ」

「恥ずかしいので温泉はちょっと」

「もう少し仲良くなつたら入つてみよう」

こくり、と伏し目がちに頷いて、その日は
海鮮丼をいつしょに食べた。誰かと食べるご
飯は、アパートで食べるご飯よりもずっとお
いしくて、何より楽しかった。

夏休みが終わり、学校が始まつても雪さん
と会う関係は続いた。切り絵を手帳に挟んで
大学に通つた。白い画用紙に描かれた女の子
は、お守りのように勇気をくれる。寂しくな
る帰り道は、切り絵をかざしながら帰つた。

「見て。綺麗じゃない？」

西日がゆらゆらと反射して、天井と壁一体
に光の波を描いていた。

「綺麗ですね」

つま先から湯に入る。内湯よりもずっとぬ
るいお湯が馴染む。大きな窓から吹き抜ける
涼風は火照つた体を冷ました。

を取り戻し、潤つていくのがわかつた。

長袖のシャツとアウターがあつても肌寒い

くらいの気候が続いた十一月のはじめ、雪さ
んと温泉に入つたことがある。秋田県民は入
浴料が五十円安くなるというのは、彼女が教
えてくれたこと。タオルを二枚借りて、赤い
暖簾をくぐる。

黒のセーターを折り畳み、シャツとグレー
のミニプリーツスカートをするすると脱ぐ所
作と、金髪の髪を丸く束ねる仕草が丁寧だつ
た。気心を知つている間柄に恥ずかしさはな
かつた。それよりも、数年経てば、わたしも
雪さんのようになれるのだろうかという羨望
が止まなかつた。

内湯の温度が高くすぐにのぼせてしまい、
階段を下り露天風呂へ向かう。

「この夕焼けを見せたかったの」

湯船のへりに肘を置き、手と腕で顔を支え
るようにして窓の外を見る。まだ位置の高い
夕焼けから、粒のようなきらめきが一直線に
揺れている。湯にも光が差し込んで、体いつ
ぱいに日を浴びるのが心地よかつた。このま
まづつと風景を見ながら、いつまでもお湯に
浸かつていられそう。言葉も交わさぬまま、
數十分はそうしてなだらかな風景を眺めてい
た。何も話していないのに、雪さんの感性に
触れられた気がした。

お風呂を出たあと、二人でコーヒー牛乳を
飲んだ。

「温泉で飲むコーヒー牛乳つておいしいです
よね」

「ほんとにおいしい」

道の駅の温泉には、テーブルがいくつも並
んでいる休憩スペースがある。休憩スペース
の眼前には窓があり、西日が眩しい。二人分
の座布団を持ってきて、隣り合うように座つ
た。大学に行くのも苦でなくなつて、以前ほ
ど生活に悲観しなくなつたわたしは、一つ質
問を投げかけた。

「友だちって、どうやつて作ればいいんでし
し」

「よう」

「まず話しかけてみるとか？ 作るっていう
より、気づいたらなつてるものだと思うけ
ど」

「わたしは友だちですか？ とは聞けなかつ
た。」「じゃあ、友だちってどんな関係だと思いま
すか？」

「いつしょに同じ時間を過ごす関係かな。ご
飯を食べたり、お喋りしたり。恋人とか家族
はさ、契約を経て関係性を確かめあうけど、
友だちには契約がないから難しいよね」

「はい。大学も苦じやくなつてきたので友
だち作りたいなつて思つたんですけど、そも
そもどんな風に定義すればいいのかわからな
くて」

「定義があ。人それぞれ違うかもよ
」「それはそうなんんですけど」

「色々考えるのも大切だけど、やっぱり、運
とタイミングはあるよ。大学生ならまず勉強
して、やることをちゃんとやつてれば、そう
いうタイミングが来るはず」

「人間いつか離れるから、いまが愛しくなる
んだと思うよ。友だちも、心の成長と共に変
わつてくる」

人間関係は誰かと築くものだからね、と付
言した。

「興味ある人に話しかけてみて、相手の話を
聞いてみるのもいいかも」

「いいですね。それ」

「立村ちゃんなら、すぐ友だちできるよ」

「ぱつとしない表情をごまかすように水を飲
んだ。」「どうしたの？」

「誰かとずっと友だちでいるには、どうすれ
ばいいんですか」

「だんだんと、わたしの居場所になつてきた
大学や、雪さんとのつながりも、永遠ではな
いのだと思うと物悲しくなる。花が枯れるよ
うに、おばあちゃんが死んだように、いつか
終わりが来るのかもしれない。愛情の味を知
つてているからこそ、再びそれを失うのが怖
い。」「遅かれ早かれ、どんな関係も終わりはある
よね」

しつとりとした声色は、霜降の寂しさを内
包している。

「人間いつか離れるから、いまが愛しくなる
んだと思うよ。友だちも、心の成長と共に変
わつてくる」

休憩スペースにある自販機で買った缶ビー
ー

ルを開け、おもむろにそれを飲んだ。どんな味がするんだろうと思つてそれを見つめる。

「じゃあ、わたしもいまを大切にすることにします」

「いいと思う。人との出会いと別れは、少なからず自分の一部になつてゐるよ」

勇気を出して話しかけてみると、友だちとまでは行かずとも、話し相手になつてくれる人が大学にいることに気づいた。手帳に挟んでいた切り絵を、教室の机の上に乗せて眺めていると、切り絵を褒めてくれる人がいた。綺麗なものにかざして楽しむことや、大切な人が作つてくれたことを告げると、その子は感心してくれた。好きなものを好きと言つてもらえると、感性を認められたような気がして踊り出しそうになる。

いつしょに温泉に入った次の週も海に行き、雪さんに大学で切り絵を褒めてくれる人ができだと告げた。その子と友だちになれるかもしれないと伝えると、笑つて喜んでくれた。海風は、刺すような冷気を纏うようになつていて、わたしたちの上着の隙間を縫うようにして体温を奪う。

「もう寒いですね」

「うん。月末には初雪が降るつて」

次の週から雪さんの姿を見なくなり、わたしも海に行かなくなつた。

気温が下がり人肌恋しくなる秋は、雪さんのおかげで乗り越えられたと思う。今年の冬はこの土地に居場所があるし、もうひとりばつちじやない。大学でも居場所が増える度に気を病むことが減つた。

岩城みなとの海を初めて見たときは、一人で見ても綺麗だと思えた。なのに、最後に一人で海を見たときは何の感動もなく、ただ侘しさと感傷を抱くだけだつた。

そこには、思い出の欠片しかないのだとうことを理解できた。手帳に挟んでいた切り絵も、いまは勉強机の引き出しにしまつているのみで、すっかり持ち歩いていない。代わりに、学校の友だちと話す時間が増えた。

月末には予報通りの初雪が降りた。

十二月は一度も海に行かなかつた。土日は友だちと遊んだり、勉強したりすることが多く、悩んでいる暇はどこにもなかつたのだ。

友だちの相談に乗ることも増えて、人から必要とされるようになつていた。

一月の暮れの秋田駅を友だちと歩いてい

正月、成人式へ出席するため実家に顔を出すと、家族からおばあちゃんの話が出ることなかつた。しかし、わたしも最近はそれほどおばあちゃんのことを思い出さなくなつていて、大丈夫になつてきていることに気づいた。相変わらずお父さんの悪口ばかり言うお母さんには辟易したが、受け流せるほどには大らかだつた。秋田に居場所がある、という確信が胸にあつたのだ。

悩むことが減り海に行かなくなつたとはいえ、実家へ顔を出せたことや、休日遊ぶ友だちができたことを雪さんに伝えたいとは思つていた。一方で、数ヶ月会いに行つていよいに、急に会いに行くのも面映ゆかつた。

心の補助輪が少しづつとれて、誰かに寄りかからなくとも、自分の足で歩けるようになつていて。親やおばあちゃんがいたから、わたしには歩く足がある。雪さんは、行き先をいつしょに考えてくれて、歩き方を教えてくれた。

離れることがあるけれど、大切なものは作れるものだつた。

た。コーヒーショップの前で立ち止まり、メニューを眺める。

「葉月ちゃん、何飲む？」

友だちは、わたしのことを下の名前で呼んでくれる。以前は両親につけられた名前が嫌いだつた。でも、両親がくれた血肉と、自分で作ってきた感性の境界がくつきりしてから、真に自分を受け入れられるようになつていた。気心の知れた友だちが下の名前で呼んでくれたときの、心の距離が縮まつた感覚に気づけるようになつていた。

わたしの憧れる大人はブラックの缶コーヒーを飲む人。頼むものはいつも決まつている。

「ドリップコーヒーかな」

「また苦いって言うくせに」

「うるさいなあ」

駅構内を通る人の中、どこかで嗅いだことのある花のような懐かしい香りがした。思わず振り返ると、見覚えのある胸下まで伸びた長い金髪の後ろ姿。

釣られて友だちもわたしの視線の先を見つめた。

「知り合い？」

「うーん。なんて言えばいいんだろう」
数秒考えてから口を開いた。

「歩き方を教えてくれた人」

詩

詩

最優秀賞

空如一声なきものに筆を向けて

大仙市 高 橋 岳 夫

新聞は読まぬ

外の世界はあまりにも騒がしい

展覧会には出さぬ

人に見せるために描くのではない

仏の前に沈黙を置くための筆

朝の光

水をうつす鉢の波紋

ひとのいない部屋に

墨の香がたちのぼる

静かに

仏の目をうつす

誰にも見られずとも

仏は見ている

金堂の奥
褪せかけた赤に
わずかに残る緑に
息を吹きこむように

その線はただの線ではなかつた
過ぎし時間と

いまだ届かぬ祈りのかたち

鉄線描

凹凸の陰影

透視の奥に

誰も知らぬ遠い山

それは教えではなく声でもなく
空如の背には誰の影もなかつた
ただ仏がいた
そして紙の上に仏は戻ってきた

空如はひとり受け取つた
空如はひとり受け取つた

そこに住まう仏たちの気配を
その筆の音を

誰かが聞いたわけではない
その色を

誰かが褒めたわけでもない
その色を

それでも
描かねばならぬものがあつた

奨励賞 月見草の花言葉は

大仙市 鈴木 仁

この星を包み込むという

瓦礫のひとつだとしても

ミサイルの穴の切岸で

ようやく晴れた青空を

目指して花は咲くだろう

見えない

爆撃機から

真夜中のハンマーが

振り降ろされても

戦争は終わらなかつた

ただ敵対する国々が

互いに勝利を宣言し

次のステージが

始まつただけだつた

どんなに時代が変わつても

静いの心は利己的で

取扱い説明書を読まずに

すべてを壊してしまつ

いま核施設に開いた穴からは

またブルームが溢れ出して

一週間もあれば

やまない紛争も

激しい気温上昇も

情報の豪雨に流された

地球温暖化を

見向きもしない

あまりにも人間的に

大きくなり過ぎた

恐竜の脳は

その未来の一点において

絶滅する歴史を

いまや遅しと

拍車をかけている

みな夏の暑さを

口にしながらも

権力というイヤホンをしている耳に

地球の悲鳴が

聞こえるはずもなく

瞞しのニューディールを

繰り返すだけの

年老いたリーダーたち

選奨賞 Parallel (ペアノナル)

どこか遠く

行つたことのない場所へ

いきたい、

と叫ぶ私の心は

本物なのか

作り物の何かなのか

潟上市 真 壁 悠 花

空と海が繋がつて
その青が滲むとき
どこか遠く

扉と海が繋がつて
扉が開くのが見える
行つたことのない場所へ

教えてよ、つて
たぶん本物の今の私が
たぶん未知の世界の私に
見えぬ地平線に問いかける

その扉の先にはきつと
知らぬ世界が待つてゐる
知らぬ私がそこにいる
そんな平行線が見える

扉が閉じた

雨に打たれて
現実に揉まれて
その理想が霞むとき
理想の青が滲むとき

行きたい
生きたい

入選 夏ズイセン

にかほ市 鈴木敏男

この花の周りを除草している母を見た
普段は葉を見る事もなく

そこにあることを知っている家族はない
「遠い悲しみ」と・・・

おそらくはこの存在を知っているのは
植えたひとであり

植えたのは母ではないか・・・

球根ゆえに普段は隠れているし
植えたのはやはり母だ

いつだつたか僕に村のある人が言つた・・・

母が母親としてあやせぬ思いは
君の祖父は長男の孫が誰よりも大事で

父も母も我が子としての君を

抱く事すら出来なかつたようだつた・・・と

帰還した父の喜びも大きかつただろう
出征した夫に代わつて汗しただろう母にも
長子を産んだ喜びは一入だつただろう

戦後八十年、この夏もまた庭の片隅には
潜んでいた魂を一気に突き上げんばかりに
花が咲いた

夏ズイセンである

誰が植えたのかは分からぬ
何故植えたのかも分からぬ

花言葉は「深い慈しみ」だ

いつだつただろか

そんな母が

僕へ手向けたかつた愛を

この花に思いを託したのでは・・・

花言葉は他にもあつた
「遠い悲しみ」と・・・

その母は植えたことを語ることなく

黄泉の国に旅立つた

その日もまた夏の暑い朝だつた

入選 ある試験の日

秋田市 小野佑真

吊り革を 捄んでいない手で
教科書を にぎりしめる朝に

去年見た 海の色をした鞆へ
教科書を しまい込んだ頃に

ぼくの船
七曲りシップス
クラークか

住宅地と 高層ビルの群れは
麦藁色の地面に 影をつくり
泳ぎ疲れた顔をした 僕たちに
「頑張つて」と エールを送る

今だけの 効力を持つた魔法と
手にした 星空柄のシャーペン
目の前の 解答用紙はもはや 僕の味方だ

空を翔ぶ ムクドリの群れは
夏蜜柑の陽光に あおられて
ラムネの青に プワリと浮かぶ
わたあめを 自在に切り分ける

水兵リーベ
ぼくの船
七曲りシップス
クラークか

水兵リーベ
ぼくの船
七曲りシップス
クラークか

時々開くドアから 吹き出す
生ぬるい冷気を 浴びながら
七夕の祈りのよう 僕はただ
ひたすら ひたすら 繰り返す

時々開くドアが 迎え入れる
生ぬるい暑さを おいはらえ
特別な呪文のように 僕はただ
ひたすら ひたすら 繰り返す

棟の木の 座席の背もたれに
汗ばんだTシャツを 預けて
もう一度 心の中でつぶやく

水兵リーベ

グリーン賞 この空白を埋めて

秋田市 堀 井 航太郎

僕たちにはみえない
弱りゆく肢体も

生命を奪う閃光も
積み上げたものが崩れる瞬間も

目を背ける僕らには映らない

僕たちにはきこえない

彷徨える魂の叫び声も
子を喪つた母の慟哭も

「まだ生きたい」と藻搔く頼りない抵抗も
傷つかない僕らには響かない

僕たちには味わえない

大気を舞う血と硝煙の臭氣も
苦し紛れに嘯んだ砂の舌触りも
何kgの装備より堪える家族写真の数g
映像に慣れすぎた僕らは感じない

僕たちはなにも知らない

引き裂かれた心の痛みも
荒野で受けた銃創の膿も

溢れ出す大粒の涙の味も
身近な人びとの大きさも

失わない僕らには なにひとつわからない

この呟きだつて

惨禍から程遠い所で

残酷なほど無知な者が生む

妄想でしかないというのに

判つてゐると思い込んでいた

グリーン賞 失望の海

能代市 佐 藤 遼 典

私は思う

この社会という海原で
私は、ただ流される波でしかない
枯れた海は

同じ明日を見せ続け
偽りと拒絶と

ほんのちょっとの愛情で
明日も生きていくんだ

私は失望の海を泳いでいます。
雨に濡れたアスファルトが
脆弱な心を映す鏡のよう

誰も気づかない、私の沈む音

私の視界に映る人々は

スマホを覗き込んでいる

偽りの微笑みと「いいね」の数

価値を競うゲームの中で

誰も私を見てはくれない

残酷な他人の視線は刃のよう突き刺さり

同調への嫌悪が胸を締め付ける

けれど、水面に映る自分の顔は

破滅への憧憬を囁き

無への願望が背中を飲み込んでくる

夜が来て、街灯の下で立ち止まる
空しい自分を抱きしめながら

短
歌

— 短歌 —

最優秀賞 終戦八十年

秋田市 鈴木修一

古き記事見返す間なく膨れゆく戦後八十年のスクランプ帳
かさぶたを剥ぐ心地せん黙し来てついに戦争を語らん人は
殺生戒おかす戦争は罪悪と唱え戦中を翻さざる
相愛のひかり珠とし灯しおく胸に抱きしか夫の戦死を
旅先のテレビに子らと悼みしよ広島の朝被爆の刻を
被爆して逝きし少女のワンピースおしゃれ心をひそと遺せる
放たれし鳩は自ずと群れ立ちて原爆の来し空を埋めゆく

奨励賞 ルソンの父は

井川町 遠藤惠美子

終戦やまとせゆ八十年過ぎしこの夏はルソンの父をしきりに想う
戦争の悲惨さ酷さを伝えんと壇上に立つ遺児なる吾は
戦争の知らざる人の多かりてとつと語る反戦の思い
ルソンにて戦死の父の五十回忌父に届けと歌いし「ふるさと」
この世にて一度も会うことかなわざり山に向かいて「父さん」と呼ぶ
涙してルソンの山を巡りし日のあの暑き夏忘ることなし
この星に戦の絶えぬ現世うつしよを嘆きていんかルソンの父は

奨励賞 合掌

鹿角市 金万和

施設にて暮らせる母の日常をいつもカメラにのぞいていたい
ガラス戸をへだつる母に「げんき」かと問えば小さくわれに頷く
面会の出来ぬコロナ禍わが書きし母への手紙百通を超ゆ
微笑みを浮かぶるさまに見えながら母はうつつのまなこをとじる
亡き母が日日使ひたる手鏡のくもり拭へばあふるる光
亡き母が傘立てて雨をしのぎたる白き牡丹のおもたげに咲く
母逝きて残れる古き和箪笥の樟脳の香は過去世のごとし

仁王門潜れば伽藍目の前に鮮やかなりし苔石を行く
再びの観音堂の木戸を開け懐かしく嗅ぐその匂いをば
チヨロチヨロと手水場に落つ真清水の飛沫しぶきに遊ぶうわばみ草は
我足りぬ事問う為に訪ねれば仏像は黙じじつと目を見つ
この齢健やかなるを請いければ床しき参道梵鐘の鳴る
我肥やす術求め来て山門を潜れば釈迦像大きく見下ろす
心閉じ然れど前向き境内に手合わす十指に六地蔵の笑む

入選 友

鹿角市 高田勝彦

今年またこれが最後と来る賀状律気な友の老いを笑えず
呼び出しの声で君だと判つたよ わが腕掴む友は白杖

「老けたなあ」「君ほどでは」とクラス会みな師の貌で肩叩きあう
微笑みの裏にどれだけ隠したか遺影に偲ぶ友の悲しみ

「まあ上れ」言葉少なに汲み交わす和解の鍋に眼鏡曇らす
生きて聞く友の弔辞に嘘はなく生前葬は笑いさんざめく
アルバムに重なりあって早や傘寿君は十五の頑是なきまま

入選 父の背

八郎潟町 北嶋香奈子

カモシカのような優しき目を向けて父の野性を再び見たき
五ページに落とされた染み許そうか父が私を許したように
チヨコパフェを食べ終えるまで童心のひげの無精をただ見つめおり

不自由なお尻を幾度取り替えて私は誰のために泣いてる

父の背をとつくに越えて夏至の陽の青々として衰えもせず

遠くから見ても分かりし父の背は鉄より寂し骨の浮き出る

父だけが手を振つて向日葵の群れの中から母の愛しき

入選 猛暑日つれづれ

由利本荘市 佐藤精子

猛暑日は山家に籠りパソコンで歌や詩を書きエッセイ綴る
文字並べ指折り数え推敲し脳かき回ことばで遊ぶ

老駆ゆえ力仕事はちょっと無理あたま搔きかき言の葉探す
新聞に投稿たんか載つた日は夕餉の菜を一品増やし

初めての詩が地元紙に拾われて泥鰌さがしの投稿つづく

農に生き自然に埋もれ歳重ね残る月日も流れのままに

来世など未体験ゆえさておいて猛暑に耐えて今日を生き切る

入選 家

にかほ市 鈴木敏男

リフォームを繰り返しつつ七十年昭和染み入るこの家に住む
床の間に槐の古木据えし父祖 永遠の幸い願う証しか

子の夢に縛りかけまじ時折に帰省すること喜びとせん

残るのも先に逝くのも大差なし同年夫婦のわれらの末路

高齢化率の高まる村に住むわれらふたりもそが率上げて

歳月を農に勤しみ来しなれど今は肯う感慨なくも

父と母われらの名前刻みいる朱入りの墓誌の汚れ淨めり

入選 ハー・ハ・・ハー

北海道札幌市(秋田市出身)

ヲ ワ リ

深緑と花蹤散らして ぼくたちは共犯者だと指差されたい
朝露で生傷を癒す茶番劇！ おまえがいない幾度目の春よ

遺された沈香に想う かの瞳が焦げついたチヨコのようだつたこと
逆光のあなたが差し出す左手の、腕の、真つ赤な命綱の数
わたしたちは天秤の向こう岸にいる そういうふうに今も生きている
嵐抱き雷雨踏みつけるパラノイア 君を泣かせたすべてが罰だ
散骨として砂浜に枝で刻む“You and Me”を波が連れ去つて

グコーン賞 雪の感触

秋田市 柳原知可子

テレビ越し今日も変わらぬ雪予報白い景色が眩しく映る
結晶が震えた手へと舞い落ちて初めて知つたその暖かさ
さわれない線で結ばる星たちと僕らの心はどこか似ていて
新雪に残る足跡交差してどこかに見える人の営み
「ただいま」と静かな部屋のストーブの返事を待つてただ睨めっこ
あたたかな空気の中で口にする氷菓の味はどこか切なく
窓の外白く塗られたキャンバスに自分の色を載せてみようか

俳
句

俳句

最優秀賞 豊饒

能代市 岸 部 吟 遊

海山のあはひの棚田耕せり
稻の花一重瞼の赤ん坊
田の中に代々の墓稲穂波
ひもすがら見得切る目玉鳥威
加勢立てのささら踊や盆帰省
出羽富士は雲を豊かに今年米
田の神へ産土神へ新走

奨励賞 仁王尊

由利本荘市 佐々木

筋骨の締まる仁王や寒の寺
皺深き仁王の眉間大寒波

春風や忿怒緩めぬ仁王尊
楼門に仁王の貫禄雲の峰
雷鳴や昂る仁王の力瘤
暗闇に仁王の眼力虫時雨
剥落の阿吽の仁王秋の声

奨励賞 掛唄

横手市 藤 井

葺き替えの奥宮光る豊の秋
陣立のごと幟立つ秋祭り

老杉の奥の掛唄霧襖
掛唄や手斧削りの荒格子
掛唄に挑む少女の眉清し
掛唄の露結ぶ間も鬨ぎ合い
掛唄の朝霧晴れて勝名乗り

ただし

奨励賞 村の未来図

三種町 三 浦 静 佳

草の市スーパーの無い村に棲む
門火焚く下駄の音なら父であり
掃苔や熊目撃のアナウンス
盆三日糞田の草に立ち止まる
棚経の少年僧のいた昭和
パブリカに近づく村の隙間かな
盆の月村の未来図探しおり

入選 浜の村

由利本荘市 佐々木

高々と風囂して村黙す
沖暗し吹雪まみれの登校児
百万遍の鉦の音凍つる浜の村
風花やロシア語刻む海難碑
刺し子縫ふ母の手かざす囲炉裏端
出稼ぎの父の文読む寒夜かな
寒の波とどろく中に村寝落つ

成

入選 全校登山

にかほ市 佐々木 亮子

記念樹の桜とあゆみ七回忌
陰日向なく生きし夫あたたかし
しんがりをつとめ全校登山かな
父と子の教師の道や茄子の花
どの部屋も夫の遺品や梅雨深し
魂迎へ相談ごとの二つほど
身に入むやかすれし文字の工具箱

入選 弥勒菩薩

秋田市 松 井 憲 一

久に訪ふ弥勒菩薩や草青む
轡のこゑのみ今朝の弥勒佛
半跏坐の弥勒菩薩の清和かな

睡蓮や弥勒菩薩の思惟しづか

弥勒菩薩月の光に濡れ今宵
印むすべ弥勒菩薩や天高し

弥勒佛へ一筋のみち冬ぬくし

入選 萬固山にて

秋田市 富 野 三千雄

参道を廻む大樹や半夏生
夏燕観音菩薩の手の上を
御靈屋の赤き唐破風緑さす
山門の柱に残る蟬の殻
床下をぬける涼風萬固山
五庵山ただただ蟬の声ばかり
白亜なる仏舎利塔や蟬しぐれ

入選 母逝く日

秋田市 阿 部 祐 子

あたたかやさしいなことも褒めし母
花の昼車椅子より母立たす
更衣母の好みを揃へけり

入所後の帰宅祝ひし秋日かな

握る手に温み移さむ冬來たる

搏動の長き旅終ふ春の朝
母逝くや九二歳の春のこと

入選 余生

能代市 塚 本 佐 市

余生など知る由もなし柿の花
あらためて帰郷のここち駅風鈴
西日いよよ家をつらぬき二人老ゆ
葉得てその数多し盆用意
ひぐらしや樹間に夕日ぶらさがり
餅干すや城址の空が日を宿す
花格散りても香る白さかな

入選 雪国に住む

湯沢市 高 橋 雄 子

湯婆のぬくみや猫と分かち合ふ
小魚のひとかたまりや冬の川
冬の雷アンモナイトが動き出す

誰も来ず何処にも行かず四日かな
ストーブの葉缶滾るや昼休み

両腕はおもちゃのシャベル雪達磨
猛吹雪裂きて。ピンクのこまち号

入選 いにしへ

秋田市 米 沢 由紀子

ことのほか小さき土偶や青葉木菟

木の実落つ堅穴住居跡の穴

この石はかつて鎌か月冴ゆる

甕棺墓大小混じり秋の暮

名は無くて払田柵跡天高し

香木は橋の名となり朧月

百年に一度の蓮の花開き

グリーン賞 秋田の秋

秋田市 成 田 伊 吹

じいちゃんの節くれた手に赤とんぼ
そつくりさんススキと空のほうき星
キリギリス旅立ち前夜のコンサート
祖母なりの仕送り術は干した柿
盆休み俺は「帰る」で君は「行く」

子と共に品種改良精靈馬

実家よりどんぶり送る孫の家

川
柳

一川柳

最優秀賞 迷界吉祥

秋田市 和 田

仁

戦場にそれは見事な二重虹
壘壕で過ごす涼夜のカルテット

地雷原一飛びしたる黒揚羽
焼け跡で遊ぶ子供の水鉄砲

雨水を掬い上げたる水中花
ジプシーと言う名の猫です晩夏光

夕波がワインナ・ワルツを奏で居り

奨励賞 春を知る

秋田市 菅 原 浩 洋

奨励賞 続編をつづる

秋田市 三 浦 千 両

ふる里のあちらこちらに秘密基地
わんぱくの冒險見てたちぎれ雲
花を愛で人を愛して春を知る
咲いて散る花一輪の美しさ

ふりかざすものがなくても生きられる
人というかたちで水になる氷
一房のぶどうが熟れて捨てる自我

新しい權でのり出す次の章
シナリオは三原色を搔き混ぜて
反省を刻む正座のひざこぞう
駆け抜ける坂でいくたび句読点
挫折したあの日の骨が太くなる
この角を曲がれば過去はもう喜劇
朝もやのブルーブレーにある期待

奨励賞 晩夏

秋田市 荒 木 小 菊

入選 オノマトペ

秋田市 小 松 隆 義

出目金と夏の暑さを分かち合う
物がたり終わつたようだ蝉が鳴く
近寄つて近寄つて唇顔を撮る
团扇絵にへちま二つがぶら下がり
子等の釣る雑魚を数えている晩夏
仏前どんどんと動かぬ大西瓜
いつまでも沖を見ている夏帽子

がはははと笑う男の照れ隠し
いざという時はおろおろする亭主
きんきらきんママだけ目立つ参觀日
ぬくぬくと懷肥やすボス議員
ちやらちやらと安い男の独擅場
しゃんしゃんと終れば酒になる会議
びーしゃらら祭りの後の虚脱感

入選 百歳と云う綾

五城目町 鶩 谷 凡 葉

百歳に願いを秘めて胸を張る

百歳の内示を生かす処方箋

人柄に百歳の粹刻む智慧

百歳のカルテを生かし第二章

百歳に健康余命問う非情

百歳を生き永らえた母の意地

百歳を天寿に乗せた神の聲

入選 言葉

大館市 岩 谷 隆 史

ふところに消えぬ一灯師の言葉
胸を打つ言葉を杖に生きている

言葉より握り返した手の温み

何気ない言葉が時に心打つ

ありがとう嬉しい言葉残つてた

日本語のひびき嬉しいありがとう

ひと言が生きる支えになりました

ヒヤッハ

— エッセイ —

最優秀賞 お見送り、そしてお出迎え

仙北市 渡辺 礼 司

スマホのラインに妻のメッセージが入った。

「十九時三十八分。神代駅着。迎えよろしく」

やれやれ、ハイボールはあと二時間お預けだ。買い物に行き、夕食を準備し、好きな酒を我慢してじつと待つていたのに……。妻の連絡は川柳みたいにいつも短く素つ気ない。ハートマークのスタンプを一個加えるとか、もう少し愛想があるものにできないものだろうか。七十七歳の亭主はため息をつく。

妻は私より十歳年上の八十七歳である。数年前から秋田市の「朗読の会S」に通っている。高齢者の交通事故が頻発する中で、車をやめ電車で行くようになつた。普通列車の時は最寄りの神代駅。新幹線の場合は隣町の角

館駅が発着駅となる。毎日一時間のウォーキングが日課の妻は健脚を誇る。神代駅へは平気で歩いて行けるが、天候などの諸事情で、ほとんどの場合は送り迎えが必要になる。帰り時間は未定。出先からラインで知らせてくる。

妻との十年という歳の差を改めて感じさせられるのが、八十年前に終結した太平洋戦争だ。終戦の年、昭和二十年をはさみ、戦中派の妻と戦後派の私とに分かれるからだ。国民学校一年生の時、東京から長野県へひとりだけで学童疎開した話や、港区青山にあつた家を東京大空襲で焼失した話などを聞かされると、隔世の感ありで黙つて拝聴するしかない。あの戦争は幼い私にとって「空腹の辛さ」と家族と離れた悲しさだったなあ」と妻は実感を込めて語る。

「朗読の会S」は、元テレビ局のアナウンサーAさんが主宰している。毎年、秋田市の「アトリオン」小ホールで発表会を行つてゐるが、戦後八十年の今年、それとは別に「戦争をテーマにした朗読会を二人でやつてみようよ」。Aさんにそう誘われたのだという。秋田市通いも疲れてきて、もう限界かなと考

えていた妻に再び火が着いた。このため、秋田市行きのスケジュールが新たに加わり、にわかに忙しくなってきたのである。

「ね、聞いて。S紙が発表会の取材に来るんだつて」

車に飛び込んでくると、妻はいきなりそう言つた。今回の公演会場はAさんの友人が経営するカフェで、午前と午後の二回に分けて行われる。五十名限定の小さな集まりなのだが、朗読の会のテーマが、戦後八十年問題を扱う新聞社の様々な企画とフィットしたらしい。朗読するのが戦争体験者であり、八十七歳の高齢女性だということも、地元S紙文化部記者の興味をひいたようだ。

妻は公演前日に秋田市に行き、会場近くのホテルに前泊することにした。私は仕事の都合で行くのは断念し、角館駅で見送つた。

「じゃあね」と私が手を振り「連絡入れるね」と妻が答える。見送ることが増え、見送られることが減つた。だが、惰性的とも思つてこの送り迎えが永遠に続くわけではない。遠くない時期、どちらかの都合で終わりを迎える時がくる。何気ない日常のやり取りを、もつと新鮮で大事なものとして扱うべきなのかな

もしれない。

「公演は大成功。神代駅十九時三十八分。迎えよろしく」

翌日の夕方、連絡が入った。大成功、という短いメッセージの中に妻の踊る心を感じとれる。半額で売っていた和牛の小間切れと、長ネギとシイタケと糸こんにゃくを合わせて買った。肉の少ない簡素なすき焼きだが、我が家では贅沢なほうの夕食である。

「S新聞の女性記者、今回は私を主に取材し

たようだわ。なにせ私はもうすぐ八十八歳だからね」

すき焼き鍋を前に、妻は熱を込めて語り始める。今回の朗読会では、自分でも納得できる収穫があつた、と嬉しそうだ。「力みがなく、自然体で」朗読することができたのだという。演劇学校出身者で、一本気で一途な気質の妻には、確かに演じすぎ力みすぎの傾向がある。Aさんにはしばしばそれを指摘されていたようだ。今回は「スースと力が抜けてできた」のだという。ほんまかいな? 私はついそんな言葉を口に出しそうになつた。

百歳の女性作家、佐藤愛子作品を朗読した時は、ご本人に似せた和服の風采と熱演が観

客を喜ばせた。力みはあつてもそれが妻の個性であり、力を抜くことだけを意識してどうなるものか。そんな疑問が残つたが、「何かをつかんだ」と喜ぶ妻に水を差す必要もなかろう。角が立つだけだ。へえ、そうか、なるほど。と相槌を打ちながら、私はお預けとなつてハイボールを、乾杯なしの手酌で飲み始めていた。

二日後、朗読会の様子がS紙に掲載された。八十七歳に敬意を表してだろうか、主宰のAさんを脇に置き、妻を主役とした写真入りの記事となつていて。妻も私も、劇団W座の舞台を降りて長いが「主役となつて何か表現したい」という気持ちはまだ残つていて。折りが合えば「歳の割に凄いねえ」と、人様が驚くようなパフォーマンスをやつてみたいたのだ。この点では妻も私と似たようなものだ。共感しながら、私はその記事を目で追いかけていた。

視野が狭くなり眼科に行くと「脳神経外科の領分です」と言われた。CT検査で脳梗塞の跡が見つかり、薬が増えた。老化は確実に進行中だ。妻は佐藤愛子にあやかり、百歳まで生きると豪語する。私にその自信はない。

妻を送迎する回数は増えたが、最後は妻に見送られ、そのまま行きつけなしになる予感がする。待てよ。その時妻が百歳なら私は九十歳だ。平均寿命をゆうに超える。そこまで生きられたら御の字ではないか。よし、妻よ。百歳まで生きろ。

能代市 杉 山 靖 広

遙か遠い記憶の糸をたぐつてみた。

私は、木の町に生まれた。町中に製材機械の甲高い音が鳴り響き、清新で艶やかな木の香が満ちていた。木とは秋田杉である。ふるさと能代は、秋田杉の町そのものだった。

米代川河口近くの貯木場には、上流から筏に組んで運ばれてきた杉丸太が山積みされていた。その丸太を馬車やボンネットトラックが、町中の製材工場に運び入れた。工場では、男女の工員が忙しく立ち働き、丸太を板に加工したり、柱や様々な建材を生み出した

りしていた。町は喧噪と活気に満ちていた。米代川流域は天然秋田杉の宝庫である。その河口に位置する能代は、古くから秋田杉の集積、加工、移出の港町として栄えてきた。

古くは文禄二年（一五九三）、檜山城主安東実季が豊臣秀吉の求めに応じて上方に秋田杉を送っている。秋田杉は朝鮮出兵の軍船となり、また伏見城の用材ともなった。江戸から

明治期、北前船によつて能代港から積み出された主要品は秋田杉であつた。

明治中期、学生時代に福沢諭吉宅に寄宿した経歴をもつ井坂直幹が、能代の地で機械による製材に成功した。それは、木材業の産業革命となつた。明治四十年（一九〇三）直幹が設立した秋田木材株式会社（秋木）は、全国の主要都市に支店や工場を開設し、その販路は海外にまで広がつた。町中には、秋木をトップとした木材加工の事業所がひしめいていた。能代は、東洋一の木都と称された。

地元小学校の校歌には、「わが東洋に類いなき 製材所もて知られる いとも住みよき能代港」という一節があつた。

こうしてできた金勇は、二階大広間に樹齢二百年の天然杉から切り出した一畳大的全面空の板材が正型の格天井に組まれた。

一階中広間の天井には、一本の丸太から取つた五枚の板が据えられた。その長さ九・一m、幅は一mある。貴重な無節の中空板である。腕のある木挽き職人が、一枚につき四日をかけて切り出した。

両天井は、全国から訪れる建築関係者が感嘆の声を漏らす逸品である。見上げる人に木都の誇りが降り注ぐ。

る。金勇は昭和十二年（一九三七）、二代目金谷勇助によつて建て建てられた。木造総二階建ての豪壮な和風建築物である。

建築に当たつては後援会が組織され、營林署の協力も得て作られた。当時の能代營林署長は、「どうせ作るのなら秋田杉の建物として後世に残るような立派な物を」と、資材の調達に全面協力した。この言葉があつて、能代市二ツ井町仁鮎の国有林に初めて斧の音が響き、金勇の資材となつた。大広間の床柱は、毛馬内營林署管内からイタヤカエデの巨木が調達され、舞台の床材には、大館市早口産のヒバが選ばれた。

料亭金勇は、日本の高度経済成長とともに大いに繁盛した。大小の宴会、著名人の来訪が引きも切らず、華やぎ輝いていた。

私も友人知己の結婚披露宴、各種の祝賀会などの折り利用した。金勇は、晴れの日に訪れる特別な場所であった。

隆盛を極めた金勇であつたが、時代の流れと後継者難から平成二十年に料亭の幕を下ろした。四代目当主は、「この建物を後世に残したい」と願い、能代市に寄贈した。能代市は、観光交流施設として甦らせた。

時代と能代の地に望まれて存在する金勇。

金勇は、時を超えてこの地の人々に愛されてきた。現在も、拭き掃除や落ち葉掃き、除雪に励んでくれるボランティア、書画や生け花を定期的に提供してくれる人、維持管理に協力してくれる人。たくさんの人たちが支えている。

金勇がいつの時代にあつても、「木都の象徴」、「天然秋田杉の殿堂」としての姿を保つてこられたのは、人々が心のより所として大切に思つてきたからに違ひない。私は、地元教員を定年退職したのち、縁あつてこの施設に勤めることができた。

ある日、金勇をたびたび訪れる外国籍の男性に、金勇の魅力を尋ねてみた。すると、

しなやかな糸となつて……。

「第一に日本らしいこと、次にいつ来ても落ち着けること。そして何よりも皆がこの建物を大切にしていること」と返ってきた。ふるさとドイツのヴィラ・ヒューゲルと雰囲気がよく似ているとも。ヴィラ・ヒューゲルは、ドイツ西部の都市エッセンにある鉄鋼王の壮麗な邸宅である。ドイツの誇る貴重な文化財に似ているという雰囲気は、この建物の歩みと人々の関わりが醸し出すものなのである。

私は、五年間を金勇で過ごし、この建物の魅力と価値に心惹かれ続けてきた。

そして、この春四月からは、ボランティアガイドとなつた。見学訪問は、個人・団体の一般観光客、学習目的の学校関係者、観光業者の視察など多種多様である。老若男女が全国各地から年間一万人以上訪れる。最近はインバウンド関係が急増している。

臨機応変、柔軟な対応を心がけつつ、木都の歴史とその象徴を後世に語り継ぎたい。私を作つてくれたこの町の記憶を次の世代に残したい。

奨励賞 バスを買う

湯沢市 高 橋 文 子

足倉山の裾野を、新緑が駆け上がりつて行く。山の頂にはまだ雪が残っている。

星野富弘さんの本にあつた「芋植えツツジ」が咲き始めるのは、まだ、もう少し先だと思つていた。

学生時代の友人と、私の娘二人を連れて、富弘美術館のある群馬県に旅行してから、もう三十年にもなる。年賀状代わりに届いた手紙に、「雪が融けて、暑い夏になる前に、会いに行くね」とあつた。再会を心待ちにしていた。

六月はあつという間に來た。風は、まだ若い青田の稻をなでて、通り抜けた。

道路から少し上つたところにある家の前に立つと、集落が見渡せる。ゆるやかに楕円を描いたような道路の、内側と外側に家が点在している。楕円の内側は田んぼと川、外側は山。三十年前には無かつたアーチ型の大きな

橋が、向こう側に見える。橋が架かつた頃の話を、母は懐かしそうに彼女に話した。

「ご飯時になると、じいちゃんが、あの橋のバスの所の畑から軽トラに乗つて來るのが見えた。手を振つて、足倉山の裾野を駆け上がつて行く。山の頂にはまだ雪が残つてゐる。星野富

弘さん

の

本

が

咲

き

始

め

る

の

は

まだ

少

し

先

だ

と

思

つ

て

い

た

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

娘たちはよく、バスに乗つて遊んだ。通路を歩き回り、吊り革にさわろうとしてみたり、降車ボタンを押してみたりした。運転席でハンドルを握り、運転士になつたりもした。

母が膝が痛いと言つた時に父は、一人掛けの座席を外してきて、ソファーアーにした。

吊り革の一つは、外の洗い場のタオル掛けになつた。

雪が積もれば、雪降ろしをする。バスの広い車内は、畑で収穫した大豆や小豆の格好の干し場となつてゐる。

乗りもの模型を作つてゐる会社の人が、東京から訪ねて來たのには驚いた。この型式のバスを探して、調べたり聞いたりを繰り返し、ついにここにたどり着いたという。都会の路線で何万人もの足となつて活躍したバスが、今、この秋田の山村でひつそりと佇んでいる。やつと見つけた喜びで、嬉しさです。良かつたです」

と、その人は何度も言い、車体のあちらこちらをくまなく撮影していつたという。

「どうやってここを探し当てたのだろうね。娘たちはよく、バスに乗つて遊んだ。通路を歩き回り、吊り革にさわろうとしてみたり、降車ボタンを押してみたりした。運転席でハンドルを握り、運転士になつたりもした。

母が膝が痛いと言つた時に父は、一人掛けの座席を外してきて、ソファーアーにした。

吊り革の一つは、外の洗い場のタオル掛けになつた。

雪が積もれば、雪降ろしをする。バスの広い車内は、畑で収穫した大豆や小豆の格好の干し場となつてゐる。

乗りもの模型を作つてゐる会社の人が、東京から訪ねて來たのには驚いた。この型式のバスを探して、調べたり聞いたりを繰り返し、ついにここにたどり着いたという。都会の路線で何万人もの足となつて活躍したバスが、今、この秋田の山村でひつそりと佇んでいる。やつと見つけた喜びで、嬉しさです。良かつたです」

「ねえ、今度はバスの所に行きたいな」

「ねえ、今度はバスの所に行きたいな」

時空を越えた、氣の遠くなるような話だけれど、すごいね」

次々と繰り広げられるバスの話に、驚き、笑い、時々質問しながら、彼女はとても楽しそうだつた。昔と変わらぬ彼女の笑顔が、私は何よりも嬉しかつた。

実に久し振りに再会した私たちは、この三十年のそれぞれの人生を、とことん語り合うのだろうと思つてゐたが、結局は、バスの話で盛り上がり、一夜が明けた。

湯沢駅に彼女を送つて行く車の中で私たちは、これまでのことよりも、これからのことが多く話した。学生時代と比べたら、もう、将来と呼べる時間は半減してゐるというのに、行つてみたい場所や、してみたいことなどを、思い思ひに話した。

「お父さんを見ていると、人生を楽しく豊かにするために必要なのは、好奇心だと思うね。それと、創意工夫だね」

小学校の先生である彼女に父をほめられ、少しくすぐつたい氣もしたが、柔らかな、優しい風に包まれてゐる気分になつた。

入選 愛猫の記

秋田市 鈴木修一

世の中に○○派なるものがあるなかで、私ははずつとイヌ派を自認して来たのだが、今はネコ派に傾いている。きつかけとなつた出会いから数年経つが、記憶は鮮やかである。

八月末の暁闇を、喉を絞つた鳥のような声が引き裂いた。音の出所はベランダに置いてあつた空きプランターの中、掌に収まるほどの塊が身をよじつて声をあげていた。産声のような強さで薄闇を脱ぐ子猫がそこにいた。

十日ほど前、居間のサッシ戸から、とある宅配便のロゴそのままの姿で、黒猫が自分と同じ色の塊を運ぶのを目撃したことがあつた。あの赤ちゃん猫だと直感し、縁めいたものを感じながら小さなぬくもりを抱き上げた。

半ズボンの私の脛をトルネードよろしく巻き登つて、血の粒がいくつもできたが、風呂に浸かると沁みるその傷さえも、愛しく思えるのだった。

素早い動きのわりに鳴き声は控えめで、黒ずくめの姿態もそれらしく、くノ一（女忍者）のようなクール系美人。ツンデレの魅力か、明け方寝所に忍び込み一緒に寝てくれるものだから、愛は深まらずにいられない。小

学生のころ「黒ネコのタンゴ」が流行つたが、言靈のように半世紀を経て実現したのだ。「キミはかわいい僕の黒ネコ、だけど時々爪を出して、僕の心をなやませる」と歌うままに……。

夏闇の声黒猫を象りぬ

闇に現れ闇に帰る野良猫の姿と、置き去り

にされた子猫の叫びを重ね、その折に作つた俳句である。母猫はもどることなく、捨てられた否、託された子猫を育てることに決めた。人間の家族となるため、我が家敷地で、もう一度産声をあげたのだから。

体重から生後二十日程度と推測され、八月六日生まれとし、ナツと命名、ミルクから育て始めた。子猫は野良の血が濃いためか、戸惑うほどにワイルドな振る舞いを見せた。膝に乗りうるにもジャンプできないものだから、

猫を観察していると、自分のやりたいことに真っ直ぐだけれど、うまく切り換えも利かせて、ストレスを和らげながら生きている。最良の同居人とたとえることもあるそうだ。一方、熱く見つめる犬の瞳は魅力だが、こちらに余裕がないと、心の荷物として積もつてゆく辛さがある。最良の友たる犬と最後に死別してから十年が過ぎ、ライフスタイルにも変化が生まれていた。

自分のことをふり返ると、群れることは苦手だが、人間觀察と動植物とのふれ合いが好きで、独り爪を研ぐよう詩歌を紡ぎつづけることが性分に合つていて。犬よりも猫的要素が多く備わっているのだった。休日の朝、早起きを催促する犬よりも、二度寝を共にする、猫との淡い共犯者のような親しみの方が、癒やしにはなりそうだ。猫だけに、夢の中で散歩するほかないという事情もあるが……。

夢と言えば、二年ほど前に鮮やかな散歩の夢を見たことがあつた。かつて飼っていた犬が、なぜか黒いラブラドール・レトリバー犬になつていて、「よかつた。おまえ、死んでなんかいなかつたんだね」と声かけて、不思

議な安堵と喜びに包まれて野中の道を歩む夢

だつた。犬はラブの血を少しひいてはいたが、毛色は金茶色のはずで、しばしいぶかしなだが、すぐに理由が分かつた。いつの間に

か黒猫ナツが寄り添つて眠つていたからだ。

「おまえが夢に混ざつていたのか……」とつぶやいて、自分なりにこの夢を占つてみた。

「胸の中にいまも生きているのだから……この子を愛で包めばいいんだ」と。ネコ派を標榜しながら、分け隔てない愛の境地に着地できたようで、心が安らいだのを記憶している。

娘らが嫁ぎ、ナツ中心の、いわば猫ファーストな暮らしのなか、小さなドラマが毎日のように起つたが、思い出すだけでも胸が潰れるような事件が、昨年の夏起きてしまつた。

タンスや本棚の上など、各部屋の最も高い場所を制霸し、ナツは遺憾なく天性のアスリートぶりを發揮した。寛容の心で、多少の悪戯も受け入れていたのだが、庭の草の匂いにひかれてか二、三度脱走されたのには困つた。すぐ捕まえて胸を撫で下ろしたが、半ノ

ラ風の飼い方はするまいと心に決めて飼い始めた分、「外に行きたい」と切望する声は、いつも耳にせつなくひびいていた。

五、六年が経ち、若猫らしい無鉄砲さも影

をひそめたかと、半ばさびしく思つていたときには、その事件は起つた。二階の網戸の縁

を時々爪で搔くのを見たことがあつたが、ついにその破れ目から屋根の上に飛び出したのだ。折悪しく雷雨迫れりの予報どおり、空模様があやしくなり始めたタイミングで……。

激しく呼ぶ母（妻）の声も耳に入らず、屋根伝いに遠ざかる後ろ姿。まもなくパラパラと来てどしや降りの雨が全てを包んだ。内弁慶にたちまち外猫の試練が襲う。濡れて光る屋根をずるずる滑り、雪止めに堰かれてうずくまる……。やがて雨が止み、ナツは濡れ鼠のまま、逃げた場所から無事部屋に帰還した。仕事から駆けつけた父が見たものは、母に拭いてもらつて乾いたばかりの君だつた。

こんなドキドキはもう懲り懲りだから、すぐにはワイヤーネットと突つ張り棒を買つてて、窓という窓にバリアを張る作業に取りかかつた。ナツは、何事もなかつたような顔で作業を熱心に見学し、それ以降脱走を試みて

いない。

ガラスのあるところ、全てワイヤーで張り巡らせた古い民家こそ、こころ豊かに猫と過ごす私の砦である。

グリーン賞 ダイナミック お散歩

秋田市 跡 部 佐 知

北東北は、わたしのお庭。

映画を一本観るために盛岡へ行つたり、イモリを探して東成瀬を歩いたり、盆踊りを観るためだけに鹿角で一夜を明かしたりしてきました。

だから、秋田から盛岡くらいまでは、気軽に行けるお庭のような感覚がある。

わたしには福岡出身の友だちがいて、その子が秋田に帰つてくるときはどんな経路であろうと盛岡を経由するのを知つていたから、

夏至のある日、盛岡駅でこつそり待ち伏せすることにした。

最寄り駅に迎えに行くならまだしも、盛岡駅だ。しかし、わたしにとつては、お庭に友だちが見えたから、靴を履いてドアを開けに行くのと同じことだつた。

盛岡駅に着いたとき、空港のリムジンバスが来るまでまだ二時間ほどあつた。わんこ

そばを食べて時間を潰そうと思つたのに、七十五杯のわんこそばを平らげてもまだ一時間も余裕がある。仕方なく、駅前のロータリーにあるベンチの、ちょうど柱の陰になつているところに隠れて、花巻空港からやつて来るバスを待つことにした。

その友だちとは、約束もしていないのに会うことが多くつた。

大学や秋田駅、スーパーでばつたり会うのはもちろん、仙台から出た新幹線でたまたま同じ車両に乗つていたことさえある。盛岡駅まで迎えに行く十日前にチャグチャグ馬コの行進を見に行つたときも、いまから福岡に帰るという友だちと盛岡駅で偶然会つたほどだ。

バス停にいた優しそうな方に頼み、出かけたときに持ち歩いているインスタントカメラで写真を一枚撮つてもらつた。写真の中のわたしたちは、お揃いのボーズで、天然水を両手に抱えて、目を細めて笑つている。

いよいよバスがやつてきて、友だちが乗り込むというときに、旅路の安全と充実を願い、わたしがお守りにしている忍び駒を手渡した。忍び駒とは、稻藁で編まれた馬を模した人形のことで、縁結びの効果があるらしい。北東北をお庭と呼ぶくらいだから、こうした民芸品にも目がない。揺ると鈴の音がなる小さな駒を、友だちは大事そうに受け取つた。バスに乗り込んだあと、窓越しに忍び駒を見せてくれた。

バスが発車して、建物の陰で見えなくなるば、と言つてくれたが、それよりも友だちを見送るほうを優先したかつた。
わたしはもう、大学四年生。残された時間は短くて、脱皮したカゲロウやセミと変わらない、幾ばくかの余命を待つてゐるだけ。チャグチャグ馬コはまた来年も見られるけれど、友だちを見送りできる機会は、いまだけしかない。

までずっと手を振り続けた。実家を離れる日

に、送迎してくれた親の車が徐々に小さくなつていくのを、駅のホームからぼーっと見ていた四年前の春を思い出した。

腕時計に目をやると、大急ぎでチャグチャグ馬コの行進に向かつて駆け出した。行進にはなんとか間に合い、友だちにもその写真を送つたのを覚えていた。

必ず盛岡を経由するとはいゝ、約束をしていない人を待つのは落ち着かないことだ。バスではなくて電車で盛岡駅に来る可能性も否定しきれない。ベンチに座つて友だちを待つている間、思い出の輪郭をなぞつていた。

昔は、思い出は数えられるものだと思つていたけれど、そうでないことがわかつたのは友だちのおかげだと思う。夜空に瞬く星々を数えられないように、思い出も数えられないものだつた。

この四年間、二人で色々なことをした。山で冒険したり、手料理を食べたり、映画を観たり、ピクニックしたり、かまくらを作つたり、家族みたいな思い出がたくさんある。喧嘩をしたことや、わかりあえないと思うよう

な出来事もいっぱいあつた。

十五時を過ぎると、空港からやつてきたりムジンバスの窓越しに、オフホワイトのシャツを着た友だちが見えた。バレないように後ろから、すみません、連絡先聴いてもいいですか？ とふざけた調子で声をかける。友だちは鳩が豆鉄砲を食つたような顔をしていて、偶然会つた十日前のときのようにいつしょに笑つた。

駅蕎麦くらい奢る、と言ひ出した友だちに、もう蕎麦はこりごりだと告げて、博物館に行つたり、アーケードに行つたり、小川の石の上を跳ねたりして遊び、自分のお庭を案内しながら駄弁つていた。一人で盛岡をお散歩するよりもずっと楽しくて、流れる時間が早かつた。

列車を使うダイナミックお散歩から帰るときは、いつも独り。

でもいまは、友だちがいる。赤いこまちで隣に座る君が、手のひらに忍び駒を返す。少しく述べられた様子の布や藁がほつれた忍び駒を見て、友だちらしいなと思つた。

最優秀賞受賞の「」とば

空如美術館の実現を願いつ

詩部門 高橋岑夫

鈴木空如は、清貧を厭わず、明治四十年から昭和七年まで二十六年間、法隆寺金堂壁画を模写。三作遺す。はじめから模写を繰り返す計画はなかつたと思われるが、金堂壁画は美術的にも宗教的にも深遠なもので、一回の模写では究めつかなかつたのであろうと言われている。模写の回を重ねるたびに線描の走りなど新しい発見があつたことを壁画模本から推察される。

旧太田町では空如美術館建設のため基本設計まで至つたが実現できず、役場庁舎に隣接する文化プラザに作品を展示できるようホールを改築、合わせて収蔵庫を新設。定期的に作品が展示されている。美術館を建設することができるなかつた悔いが深まるばかり。そこの気持ちを抱えながら作つた詩が賞をいただき有難く思つてゐる。いつの日か空如の故郷に美術館が実現されることを願つてゐる。

魂の出会いから

短歌部門 鈴木修一

昨年度、教職最後の年に生徒たちと読んだ文章の一節、「彼女たちは、初めから犠牲者だつたのではなかつた。陽の光の下で生きていたのだ。今の私たちと同じようにー」、これを受け、「被爆して逝きし少女のワンピースおしゃれ心をひそと遺せる」と詠んだ。

酷い傷痕を残し、夢や未来までも戦争は奪い去つたのだ！その怒りや哀しみが選者の先生方の心に届き、受賞の榮えに浴することができたことをとても嬉しく思う。

「少女たちの『ヒロシマ』」の著者梯久美子氏は、やなせたかし『詩とメルヘン』編集部の一員で、『やなせたかしの生涯』を著わしている。「みんなの夢をまもる」というアシパンマンの使命が、戦争体験に根ざしていと知り感銘を受けた。本と人を通し、魂が出会い、生まれる感動を核に、今後も創作に励みたい。

出会い

俳句部門 岸部吟遊

自家近くの小学校に大きな松が枝を傾けています。能代の砂防を推進した賀藤景林の植えた松です。海の方を見れば風の松原が広がっています。水田は常にかたわらにあり、四季折々の表情を見せていて。しみじみと身に入むふるさとの原風景です。

そんな何でもない、あたりまえのように見ている光景は決してそうではないのではないか。そこには人々の暮らし、歴史や風土が重層的につながっているのではないか。ふるさとの自然にどっぷりつかり、詠み続け精進していく。俳句に出会い、生かされている事に感謝しています。

選をいただきました諸先生方、又俳句を愛する仲間の皆様に深く感謝と御礼を申し上げます。ありがとうございました。

ギヨ、ギヨ！

川柳部門 和田 仁

メンタル・クリニックのような選に、思わず驚嘆。

選者の斬新で寛大な知性感性に感嘆。
アキタの川柳界の革新性、対応力に衷心より敬意を表します。

既存から脱け、常に異質を昇華する鍊磨を

怠らない。
さすがです。

「最優秀賞だ」というと妻は素直に喜んでくれた。だが「君の事を書いた」と言つたとたん、「もう、嫌だ」と言い放ち、離れて行つた。妻はなぜ、自分のことを書かれるとご機嫌斜めになるのか。理由がよく分からない。

十歳年上の妻はW座の劇団員時代、属するグループのリーダーだった。生真面目一直線の彼女が、能天氣で腰の落ち着かない私に突然言い寄ってきた。驚きと勢いに飲み込まれて、つい一緒になつてしまつた。もう五十年も前の事だ。

八十八歳になつた今も、彼女は新しい事に挑み、進化を続けている。私とて七十八歳の文章修行中の身の上、面白い題材が身近にあって、書かないという手は無い。怖い目で睨まれても、それでも私は書き続ける。

それでも私は書く

エッセイ部門 渡辺 礼司

選評

小説・評論

風土と感性が交わる地点で

石倉 葵

今回で五十八回目を迎えた「あきたの文芸」は、地域では歴史ある文芸賞として知られています。県内外から幅広く応募のある本賞ですが、何をもつて「あきたの文芸」とするかは、これまでの受賞作の経緯や、選考委員それぞれの基準もあるかと思います。私が重視したのは、まず小説として成立しているかどうか、次に趣意が明確に伝わるかどうか、そして自分にしか書けない内容を書いているかの三点でした。これらに加えて、秋田の地名や風景、秋田弁など、この土地ならではの風土や文化が感じられる作品には一点を加点しました。また県外からの応募があるこ

とも考慮し、秋田に限らずともどこかローカリティーを感じさせる作品にも同様に加点しています。

奨励賞を受賞した「海辺の補助輪」は、県外から秋田に進学した大学生が主人公です。

両親の離婚を機に孤独を感じていた主人公にとって、祖母は家族であり、友人でもあります。祖母の死は居場所のなさ、帰る場所のなさを感じる大きな喪失であり、不安の種であります。そんな主人公が知らない土地で少しづつ暮らしに慣れていくなか、秋田の海沿いや駅の風景、秋口の冷たい風など随所に秋田らしい情景が描かれ、土地勘のある者にとつては鮮やかに風景が立ち上がる読み心地が好印象でした。選考委員のあいだで「この温泉は夕日が見えるのか」と議論になりました。モデルとなつた温泉が思い当たつた私は「こここの温泉は大きな窓があるんです」と他の選考委員の先生について解説してしまいました。モデルとなつた温泉が思い当たつた私は歳（満二十五歳）が対象のグリーン賞への応募は昨年よりやや増加し、全体として文章の質の底上げも感じられたことは歓迎すべき変化です。十一人の作家が小説の執筆に挑んだことに、まずは心からの賛辞を贈りたいと

通して心の傷や孤独を少しづつ乗り越えていく主人公の心の動きや人間関係の変化は共感を呼ぶものでした。

その他の作品も人物の魅力やエピソードの独自性、設定のリアリティやユニークさなど、評価できる部分やきらりと光るものはありましたが、入選にはあと一歩及ばず、今年は奨励賞一作の選出にとどまりました。

「あきたの文芸」の選考委員を務めて今年で三年目になります。本賞は近年、若い世代からの投稿が減少している点が課題です。小説の規定は二万字以内。ジャンルでいうと短編小説にあたります。限られた紙幅のなかで、読者に強く響く表現力や簡潔で効果的な構成が問われるこのジャンルは、難易度が高く、他ジャンルより投稿数が少ない傾向が続いてきました。そんななか、青少年（満十六

一方で、近年は生成AIを用いた文章作成

も最優秀賞には届きませんでしたが、全体

も盛んに行われています。文章的な間違いや

技巧の稚拙さは例年に比べて目に付きにくくなりましたし、作品としての論理性の欠如や

アラが目立ちにくくなりました。本賞では生

成A-Iを使用することは不可とされています

が、「正しい文章を書く」ことはすでに前提となつた世界に私たちにはいると実感しました。そのなかで、小説という形式でしか伝えられないことを描き、どんなメッセージを伝えようとしているのかがますます重要なつ

ていていると感じています。奇をてらう必要はありません。むしろ自分の暮らす足元をしつかり見つめ、社会的なテーマと自分の身近な世界がつながるポイントを探すこと。そこから立ち上がる物語に耳を傾けることが、あなたが書くべきテーマを見つける近道だと思います。

これからも「あきたの文芸」に多くの応募が集まり、ここでしか読めないユニークで力強い作品が育つことを心より願っています。

地域の風土や文化を背景に新たな感性が花開き、地方ならではの文芸活動がよりいつそう豊かに発展していくことを期待しています。

十一の作品かじ

尾崎加奈

今年度の小説・評論部門への応募は十一作品。昨年より応募数が増えたことに喜びを感じるとともに、その約半数をグリーン賞候補作が占めたことに驚きと頗もしさを感じました。どの応募作品からも作者お一人おひとりの創作への熱意がひしひしと伝わってきます。今年度の応募作は、主題の設定に工夫が見られ、意欲的な作品が多くありました。身近な人間関係を描いたもの、歴史に取材したファンタジーやノンフィクション、現代社会の闇に切り込んだフィクション、そして近未来を描いたSFなど。時代を反映した題材選びに、作者が様々なことにアンテナを張り、取材して創作に臨んだ姿勢がよく表れています。

さて、審査に当たり、私は次の三点を基準としました。一つには、作品のテーマや展開に独自性があり、読者を最後まで惹きつける魅力があること、二つ目として、人物造形や心情描写が豊かでテーマをより深く描くこと

に繋がっていること、最後に、作者が読者に伝えたいものがあること。これら三点をすべて成立させることは至難の業ですが、それを成し得たとき、作者は読者の心に響く何かを届けることができるのだと思います。

今年度の受賞作は、奨励賞の『海辺の補助輪』です。グリーン賞候補でもあつた本作は、主人公の心情を豊かに描き、喪失、孤独、不安、嫌惡、憧憬、ためらい、期待など若者の心の機微を丁寧に捉えました。これは、選者三名が一致して評価した点です。特に、作者の描く秋田の情景と主人公の心情が絶妙に重なり合い、人物造形に深みをもたらしました。家庭、学校、祖母との外出先、海辺、温泉、車内、大学など多数の場面をちりばめ、両親、祖母、小中学校の友人、雪さん、大学の友人らとの関係から、主人公の心理を次々と描出していく作者の手腕は見事でした。そこにふと手を入れた「切り絵の女の子」。主人公の心にそつと寄り添うモチーフとして色彩豊かに描かれます。自分とは誰か、自分は何なのか、自分はどうありたいか。そんな主人公の葛藤は、同時に、作者から読者へのメッセージでもあり、読者はこの

問い合わせ「切り絵の女の子」という視覚的な印象で受け止めることでしょう。第二の主役である雪さんの人物造形がやや粗く感じられましたが、作品全体として読者を惹きつける力が十分に發揮されています。

今回、入賞には至らなかつたものの、小説の芽吹きを感じさせる作品が多数ありました。高校生の部活動を描いた青春物語は、秋田の方言が豊かに遣われ、文化的地理的因素がちりばめられた魅力的な作品でした。特に、他者の呼び名を工夫することで主人公の他者に対する認識や関係性の薄さを表現したのは巧みでした。次に、AIと人間の共存を描いた作品は、人類がいずれ直面する衝撃的な問題を提示した意欲作でした。また、東南アジアからの留学生を現代の奴隸と見なす社会の闇を描いた作品は、日本のみならず国際的な社会問題を提起するもので、題材の切り口が斬新でした。他に、身近な兄弟姉妹や恋愛関係を丁寧に追つた作品も複数見られました。不思議な穴から過去や現実を見るという発想も興味深かったです。三国志に取材した作品はファンタジーのようなドラマがあり、情景が目に浮かぶような描写が見事でした。

手記から想を得た歴史作品は独創的で、登場人物の会話の続きを聴きたくなります。最後に、実体験から故事成語の意味や成り立ちを読み解く意欲的な作品もありました。皆さん的作品の種が、読者の手に渡つたときにどのように開花し、何を読者の心に残すのか、今後の創作に期待します。

審査を終えて

岡 英里奈

今年度から審査員の一人に加えていただきました。審査に当たつて、改めて私自身が小説や評論を読む際に何を大切にしているのか、どのような作品を好ましく思うのかを教えられた気がしております。

私が今回の審査の基準に置いたのは、まずは文章や構成の完成度です。それぞれの文や表現は、走り書きではなく推敲の重ねられたものになつてゐるか、物語や論理の展開は、飛躍や破綻のない、説得力のあるものになつてゐるかを重視しました。要するにそれは、単なる技術的な巧拙だけではなく、作者その

人が作品の最初の読者として、自作に対してもどこまで鋭い眼を向けられているかということがだと思います。今回の応募作の中には、創作への意欲は十分に感じ取れるものの、残念ながらそのような読み手としての意識に欠けている作品がいくつありました。

二つ目の基準は、作品そのものにその人でなければ書けないような独自性があるかどうかです。どこかで聞いたことのあるような言い回し、どこかで読んだことのあるような話は、おそらく今後AIが人間以上の完成度で量産していくよう思います。そのような類型的な表現をいかに避け、登場人物が立つ空間一つ、セリフ一つに、どこまでの具体性、個別性を付与できるかが、人間の力の見せ所だと思います。

奨励賞を受賞した「海辺の補助輪」は、上記の二つの基準を高いレベルで満たすものでした。とりわけ、主人公が抱える「心の穴」の内実や進学後の秋田での生活、救いを求めて訪れた海岸や岩城みなと駅近辺の描写など、細部の書き込みの密度が物語にリアリティとオリジナリティを与えていたように思います。登場する地名が、単なる記号では

なく「生きられた場所」として描かれているという印象を受けました。また、「急に心の穴が大きくなつて」や「化粧水をつけたあとほつぺたのよう」にといった何気ない表現にも、書き手の身体性、血肉から湧き出てきた言葉としての力を感じ取ることができます。

一方で、そのような「私」をめぐる叙述の緻密さと比較すると、もう一人の主要人物である「雪」の書き込みの甘さが気になります。例えば彼女は「私」に向かつて「（海へは）バランスを取りに来る」、「母親の愚痴つて私の否定なんだよね」といった言葉を発しますが、そうした言葉そのものは非常に魅力的であるものの、彼女がなぜそれらを会つて間もない「私」に語るのか、彼女は一体どんな人物なのかが十分に説明されないため、結果としてその存在がどこか観念的で、作者や「私」にとつて都合のよいものに感じられてしましました。ラストの「私」と雪の別れのあつけなさについても、雪の人物像次第で読後感が変わつくるように思います。

その他の応募作では、「淳子さん」、「わをん」が特に印象に残りました。「淳子さ

ん」は昭和六〇年代の秋田を舞台にした若者のラブストーリーで、主人公の働くデパートの様子や男鹿街道沿いの寂れた食堂といったデイテールと、篠田節子や林真理子を思い起こすようなどこか飄々とした文体に魅力を感じました。「わをん」は県内の吹奏楽部に所属する「わたし」の日常を描いた物語ですが、吹奏楽部の面々や顧問の先生、秋田弁を話す用務員さんといったそれぞれの登場人物が魅力的に描かれており、また冬の学校という空間の描写にも優れたところがあります。ところどころに文章の粗さや構成の甘さがあり、受賞には至りませんでしたが、それぞれに独自の世界観がありました。次回作に期待したいと思います。



保坂英世
『言葉を大事に』

詩

この文章は小説の書評であるが、これは詩でもまったく同様だなと思った。作品を書くためには言葉との出会いが必要になるのだが、出会うとは言葉の種類と作用を知るということである。散文は多くの人に伝わるよう書くのだが、さいわい詩は個人の感じたものを保とうとするので少しばら自由度があるのかもしれない。詩の場合は主題に迫る視線の深度や角度、使用する言葉等には個人の匂い

がたちこめる。本来言葉は多義的なものでもある。だからこの多義性を巧みに使うことで表現の魅力を広げることもできるだろう。さて今回はみんなさんのどのような言葉に出会えるだろうか。

今回の応募作品は三十三篇で昨年より八篇の増、最近減少傾向だったのうれしい。各作品からは伝えたいことがヒシヒシと感じられ、戦争に関連する箇所のある作品も多かつた。しかしその訴える力も、構成や言葉遣いによって作品としての差がついてくる。残念ながら吟味の足りない作品も目についた。

このたび私がまず注目したのは『空如一声なきものに筆を向けて』である。法隆寺金堂壁画を模写したことで世に知られる仏画師の鈴木空如をテーマとし、完成度の高い凛とした文体で表現している。「そして紙の上に仏は戻ってきた」の締めくくりもいい。次に注目したのが『月見草の花言葉は』で、誰しもが抱く現代の矛盾がテーマ。歯切れのいい文体で、リズムが心地よい。最後の「ミサイルの穴の切岸で／ようやく晴れた青空を／目指して花は咲くだろう」からも鮮やかな映像が伝わってくる。選考委員の間でも両作品の評

価が高く、前者が最優秀賞、後者が奨励賞に早々に決まった。

もう一つの奨励賞『Parallel (パラレル)』からはさわやかさとポエジーが感じられる。各部分を細かく見ると別の書き方があるかもしれないが、そこら辺はこれから勉強次第。可能性が感じられ今後を期待する。

入選の『夏ズイセン』は母への思いを表現した詩。テーマと花のつながりで読ませるところが成功した。ただし言葉の吟味は今一つ。全体に無駄な言葉が多いので、省くことに留意してほしい。例えば「夏ズイセンである」の「である」、「生まれたらしい」

「朝らしい」の「らしい」は必要なのか?また「夏ズイセン」「ナツズイセン」「夏水仙」のどれが一番読者に訴えるのか吟味したのだろうか、といったところ。もう一つの入選『ある試験の日』。遠い昔の試験前の気持ちを思い出した。この作品からは光と色を感じた。それを意識したかどうかは分からないが、読者に多くを感じさせれば良い作品になる。

他の作品で目にとまつたのは『うつたあくび』、何げない日常がよく描かれている。

言葉が多すぎたかな。『青柳綠子先生のこと』、『五年日記』、『絵踏のむこうに』など。

グリーン賞の『この空白を埋めて』、身近に経験したこととを書くわけでないので少し観念的にならざるを得ないでしょう。「家族写真の数g」等の工夫も見える。『失望の海』、私も昔こんな詩を書いたような。若かっただと今は思うけれど。

たくさんの作品を読ませていただき、ありがとうございました。

*秋田県現代詩人協会会員、詩誌「日本海詩人」同人



詩作の継続を

前田 勉

今年の応募総数は三十三編。昨年に比べて八編増で、数年ぶりに三十編を超えた。年代別では十代が最多の十二名。これまたうれしいことであつたが、三十代と四十年代の応募がなかつたことは残念であった。

委員三名による選考の結果、最優秀賞一編、奨励賞二編、入選二編、グリーン賞二編となつた。

・最優秀賞 「空如——声なきものに筆を向けて」

静的な時間と緊迫した情景を織り込んだ作品である。法隆寺金堂の壁画を模写したことでも知られる鈴木空如は、大仙市太田町出身。この先人の精神に近づきながら模写する様を、選んだ最小限の言葉で活写している。やや精神的な色合いが強い感もあるが、だからこそ静的な描写がここに活きているともいえる。「形にならぬものの静けさ／火の前にすでに仏は筆にうつっていた」「そして紙の上に仏は戻ってきた」と書く後半は、一九四九年、法隆寺金堂が失火にあつたことを指しており、深みのある表現となつた。

・奨励賞 「月見草の花言葉は」

第一連からインパクトのある言葉が続く。

「真夜中のハンマー」とは、今年六月にアメリカがイランの核開連施設に対して行つた際の作戦名。そのことを知ればこの作品のモチーフと情景は見えてくる。「互いに勝利を宣言し／次のステージが／始まつただけだつ

た」という現実は、「どんなに時代が変わつても／諍いの心は利己的で／取扱い説明書を読まずに／すべてを壊して」きた負の歴史でもある。終連に望みを残している。

・奨励賞 「Parallel (パラレル)」

扉を境にして未知の世界と現実の世界を位置づけ、揺れ動く自身のあり方を問う。素直な書き方に好感。「行きたい」「生きたい」「いきたい」とする心情表現も、「と叫ぶ私の心」が本物か作り物の何かなのかと問う次行にかかっていることでうまく作用している。

・入選 「夏ズイセン」

戦後八十年の今夏も夏ズイセンが咲いた。植えた（かもしれない）ことを語ることなく他界した母の思いへ寄り添いながら、この花と自身のつながりを表す。作者の心情がじんわりと伝わってくるが、全体的にやや散文的で説明しすぎた感が残る。

・入選 「ある試験の日」

実にリズミカルだ。元素番号の一から二〇までを暗記する語呂合わせを繰り返しながら、バスに乗つて登校する。バスから見える情景表現もイキイキとしている。「今だけの

効力を持つた魔法」を持つてゐる「僕」の姿が素敵だ。

・グリーン賞 「この空白を埋めて」

戦争とその惨禍を現実として知らない「僕たち」。そのことをストレートに表してゆく。そして終連、「この咲きだつて（略）妄想でしかないというのに」と書く。それは「僕たち」だけでなく、読む人もまたそういうのだという思いを湧き出させてくれる。

・グリーン賞 「失望の海」

具体性がなく観念的ではあるが、今の自分を直視し表出しようとする姿勢に好感。第一連一行目の敬体と読点打ちが特徴的で、この一行が冷静さを伝える効果にもなつてゐる。

入賞作品以外で注目したのは、「絵踏のむこうに」「五年日記」「母達の念い」「うつたあくび」「盆の朝虹」などであつた。

選を担当して三年、多くの感性とその作品に出会うことができた嬉しい期間であつた。

皆さんが今後とも意欲的に詩を書き続けることを切に願い、選評とする。

詩誌「密造者」「海市」各同人。県現代

詩人協会、日本現代詩人会、日本詩人クラブ各会員。秋田市。

詩界の沼から

堀江沙オリ

俳句や短歌がこれだけ隆盛の時代、沢山の詩の応募が嬉しい。詩は縛りが無いだけに何をどう描き自分を投影するかが難しいかもしれないが、魅入られれば沼にはまる。どう広げ、どう絞るかの作業も案外楽しい。

全作品の中には面白い試みもあつたが日本語として不十分だつたり、散文や論文や童話や歌詞ならと思う作品もあつた。その中で受賞作品は紛れもなく「詩」だつた。惜しい作品も多かつた。だから選外でも落ち込まず、心と感性のアンテナを立て、何度も推敲し、書き続けてほしい。

若い人の作品からは、不安や希望、自虐、自分とはという哲学や、大切な存在、日常が生き生きと立ち上がって見えた。読書やネットから吸収した現代の姿や、熟達を感じた異色作もあつた。若い人は詩の書き方をよく知

つてゐる。詩を愛する教育者がいるとしたらそれもまた嬉しい。今が不安で、未来は掴みどころなく、感受性に整理がつけられなかつたり、生活の変化で詩から遠ざかるかもしれないが、いつかまた詩と再会したなら今回書いた詩の心を忘れずに人生の中で表現をし続けてほしいと切に願う。

人生を経たと思われる人の作品には私の知らない時代も描かれ興味を覚え、また戦後八十年に亘る詩も多かつた。身近な生活や家族への思いも多数綴られていた。人生の一部を切り取ることに関しては、体験した事柄や年月は強みにもなれば、逆にそこに寄りかかってしまう弱みにもなる。思いが表現に勝つてしまふ危うさは、体験の重さとのバランスで回避できると思う。とにかく詩と向き合つて、書き続けてほしい。何歳になつても新しい気づきはあり、感性は更新できるのだから。

「Parallel」

若い感性が本気で想像し、創造した。パラレルワールドと現実の対比も自然で氣負いがない。やさしい言葉で作品世界を伝えるのは実はとても高度で、難しいことなのにこの詩はそれをやつてのけた。すごい。

「入選「夏ズイゼン」」

過去と家族を美化せず客観的に詩として表現できるまで、どれだけの葛藤と書く上で修練があつたろうか。終連のまとめ方に至る構成力も見事だ。少しの言葉の整理を。

「ある試験の日」 時間と場所とバスの中の情景、心情、元素記号の暗記の精度の表現

ねた無駄の無さ、言葉の技術、独自性、構成力も高度。完成度が高い詩である。空如や壁画の知識が無くても優れた詩だが、解しにくい箇所も。

奨励賞「月見草の花言葉は」

書き慣れた人の作品。社会性のある詩はともすれば思想が言葉を越えてしまいがちだがこの作品はそうではない。構成、暗喩、最終連への流れと帰結も巧み。問題意識を持ち書き続ける姿勢を見倣したい。やや観念的な箇所と助詞の用い方に一考を。

「Parallel」 若い感性が本気で想像し、創造した。パラレルワールドと現実の対比も自然で氣負いがない。やさしい言葉で作品世界を伝えるのは実はとても高度で、難しいことなのにこの詩はそれをやつてのけた。すごい。

に読み手は作者と同化していく。二連などの表現力、言葉のリズムも「うまい」としか言えない。試験結果をきいてみたい。

グリーン賞 「この空白を埋めて」 読み

手自身につきつけられた現代の命題に圧倒される。各連の最終行の的確さも優れている。

真摯に問題意識を持つ若い人の姿勢、想像し

た痛みへの独自表現もいい。細部の言葉の用

い方に一考を。

「失望の海」 ひりひりと痛い。かつて同様の辛さの中にいた私は、辛さを詩に出来なかつた。理想と現実の落差を突きつけられ、周囲や社会の矛盾に気付く感性は自身にも容赦が無い。でも生きて、生きてほしい。そして書いてほしい。少しだけ言葉を整理すれば もっと伝わる。

(「北五星」「左庭」所属)



古澤りつ子

終戦八十年

太平洋戦争が終戦して八十年が経つた今年は、戦争と平和についての作品が多くなった。そのなかでも「終戦八十年」は、原爆をテーマとして書かれており、自分や家族の戦争体験をテーマにした他の四作品とは趣が異なつていた。

母への挽歌が切々と、わかりやすい平易な言葉で紡がれている。しみじみと悲しみが伝わる作品である。

面会の出来ぬコロナ禍わが書きし母への手紙百通を超ゆ

亡き母が日日使ひたる手鏡のくもり拭へば あふるる光

母逝きて残れる古き和箪笥の樟脳の香は過去世のごとし

一首目、コロナ禍の頃は面会が制限され、入院している人、見舞う人のどちらにも辛い時期だった。「母への手紙百通を超ゆ」に親子の情愛を感じた。手紙ならば、何度も読み返すことが出来るし、どんなにか励まされたことだろう。二首目、「くもり拭へばあふるる光」に心惹かれた。亡き母を偲びなが

かさぶたを剥ぐ心地せん黙し来てついに戦

争を語らん人は
(「北五星」「左庭」所属)

被爆して逝きし少女のワンピースおしゃれ
心をひそと遺せる

放たれし鳩は自ずと群れ立ちて原爆の来し
空を埋めゆく

一首目、被爆者の語り部が、戦争を語つて
いる場面。「かさぶたを剥ぐ心地せん」に注
目した。心に封印してきた傷跡を、一気にさ
らけ出した様子がよく表現されている。二首
が

短歌

ら、手鏡のくもりを拭つてゐる行為が具体的で、作者の心情もそこに溢れています。三首目、「過去世のごとし」は、親子の縁は過去世からずっと続いている、深い縊と思い至つた作者の感慨がある。樟脳の香がそれを思い出させてくれた。母親を亡くした喪失感は少しずつ埋められていくのだろう。

「ルソンの父は」

戦後八十年がテーマの作品。父が闘つた戦場であり、戦死した場所、ルソン島を訪ねた連作だ。

この世にて一度も会うことかなわざり山に向かいて「父さん」と呼ぶ

涙してルソンの山を巡りし日のあの暑き夏忘ることなし

この星に戦の絶えぬ現世を嘆きていんかルソンの父は

一首目、二首目、作者は一度も会うことかなわざる、父親を恋う歌が続く。激戦地であったルソンを慰靈のために訪ねたが、もしかして、遺骨も見つかっていないのかもしれない。ルソン島の山に向かつて「父さん」と呼ぶ声は心搖さぶる。三首目、平和を願う父の気持ちちは、そのまま作者の気持ちでもある。

今も戦争の絶えない世の中を嘆いている。

「合掌」

一連の作品は、作者の敬虔な信仰心に裏付けられている、一心に道を求める姿に心惹かれた。

仁王門潜れば伽藍目の前に鮮やかなりし苔

石を行く

我足りぬ事問う為に訪ねれば仏像は黙し

じつと目を見つ

チヨロチヨロと手水場に落つ真清水の飛沫に遊ぶうわばみ草は

一首目、参拝に訪れたお寺の様子が良くわかる。

「鮮やかな苔石を行く」は現在形

にして、「鮮やかな苔の石の道行く」くらいにしたらいかがだろうか。

二首目、祈る作者とそれを見つめる仏様の慈悲のまなざしの温

かさが感じられる。「じつと目を見つ」として

いるが、「われの目を見る」くらいがすつきりしている。

三首目、うわばみ草は山菜のミズのこと。

「飛沫に遊ぶ」で、手水場から

流れ出る清水を受けて、生き生きと成長して

いる様子がよく表されている。

その他に注目した作品について述べてお

「父の背」

五ページに落とされた染み許そくか父が私を許したように

チヨコパフェを食べ終えるまで童心のひげの無精をただ見つめおり

「ユー・エン・ミー」

わたしたちは天秤の向こう岸にいる そう

いうふうに今も生きている

指差されたい

わたしたちは天秤の向こう岸にいる そう

いうふうに今も生きている

グリーン賞

「雪の感触」

結晶が震えた手へと舞い落ちて初めて知つたその暖かさ

新雪に残る足跡交差してどこかに見える人の営み

七首の連作としてのテーマがはつきりとしており、何よりも五七五七の定型を守つていて韻律が整っている。読んでいて気持ち

が良い。ただ、全て三句切れになつていて

ので、連作としては単調になつてしまつていい。これからの活躍が期待できそうだ。

秋田県歌人懇話会副会長。歌集『魔法の言葉』



選を終えて

加藤トシ子

- ・応募原稿を拝見して、非常に残念に思つたのは、原稿の書き方が粗末な人が少なくないということです。誤字・脱字・新旧仮名遣いの混交、原稿用紙の書き方の間違い等が、少なくないという事です。

「秋田の文芸」は県主催のレベルの高い大事な文芸集です。お互に気をつけましょう。

○最優秀賞「終戦八十年」

- ・被爆して逝きし少女のワンピースおしゃれ心をひそと遺せる

・放たれし鳩は自ずと群れ立ちて原爆の来し空を埋めゆく

- ・被爆して逝つた少女のおしゃれ心。遺されたワンピースに、一度でも袖を通した事があつたのだろうか。原爆がなかつたら、戦争が

なかつたら、最もおしゃれをしたい年ごろだつたのに。単に「切ない」では、すまされない。こんな少女がいっぱいいっぱい居たのだ。

・「我足りぬ事問う為に」「我肥やす術求め来て」と、求道の思いが深い作者。そんな作者に「黙し」「じっと目を見つ」「大きく見下ろす」のみの仏像。

○奨励賞「母への手紙」

- ・施設にて暮らせる母の日常をいつもカメラにのぞいていたい

・微笑みを浮かぶさまに見えながら母はうつつのまなこをとじる

- ・「いつもカメラにのぞいていたい」「母への手紙百通を超ゆ」「母はうつつのまなこをとじる」と、施設にいる母を思う娘の思いがあふれている。言葉の使い方が上手い。

○奨励賞「ルソンの父は」

- ・この世にて一度も会うことかなわざり山に向かいて「父さん」と呼ぶ

・一度も会う事が叶わなかつた父への思い。

- ・叶わなかつた故に、秘かに「父さん」と呼ぶ思いは深い。

○奨励賞「合掌」

- ・我足りぬ事問う為に訪ねれば仏像は黙じじつと目を見つ

・我肥やす術求め来て山門を潜れば釈迦像大きく見下ろす

○入選「友」

- ・今年またこれが最後と来る賀状律気な友の老いを笑えず

・「これが最後」「これが最後」と来る賀状が確かにありますね。作者も「老いを笑えず」と表現したように、ある程度の年齢に達しないと分からぬ事なんです。

○入選「父の背」

- ・不自由なお尻を幾度取り替えて私は誰のために泣いてる

・「私は誰のために泣いてる」「父の背は鉄より寂し」等の魅力的な表現は、秀逸。

○入選「猛暑日つれづれ」

- ・来世など未経験ゆえさておいて猛暑に耐えて今日を生き切る

・「来世など未経験ゆえ」「今日を生き切る」など、説得力があります。

○入賞「家」

- ・リフォームを繰り返しつつ七十年昭和染みに入るこの家に住む

・過ぎ去ったものは、みな懐かしい。愛着

七十年の家に、住み続けることもまた幸せ。

○入選「ユー・エン・ミー」

・深緑と花蹴散らしてぼくたちは共犯者だと
指差されたい

・共犯者と言われる事も、また嬉しい僕達。

○グリーン賞「雪の感触」

・さわれない線で結ばる星たちと僕らの心は
どこか似ていて

・恋人の自分たちを星に例え、新鮮で楽しい
作品。

・『かりん』同人・『かりん秋田』・飯田川
短歌会・秋田県歌人懇話会理事・日本歌人ク
ラブ会員・第一歌集『いちまいの葉っぱ』
・第二歌集『にまいめの葉っぱ』

選を終えて



熊 谷 すが子

「終戦八十年」
古き記事見返す間なく膨れゆく戦後八十年

のスクラップ帳

かさぶたを剥ぐ心地せん黙し来てついに戦
争を語らん人は

相愛のひかり珠とし灯しおく胸に抱きしか
夫の戦死を

戦後八十年が過ぎ、体験を語り継ぐ人も少
なくなつて日々色褪せてゆく戦争。その悲し
みや苦悩を俯瞰した目で詠つている反戦歌と
も言える。「かさぶたを剥ぐ心地に戦争を語
り始める」という表現に心情が凝縮されてい
る。

「母への手紙」

面会の出来ぬコロナ禍わが書きし母への手
紙百通を超ゆ

亡き母が日日使ひたる手鏡のくもり拭へば
あふるる光

そこはかとないユーモアが傘寿を感じさせ
ない若々しさを醸し出し、しみじみとした友
情が伝わつてくる。定型の中に会話や事象が

過不足のない整つた七首。「手紙百通」
「手鏡のくもり」「和箪笥の樟脑の香」など
の具体が歌に生氣を与えている。亡き母への
追悼歌として母を恋う深い思いが伝わつてく
る。

「ルソンの父は」
猛暑日は山家に籠りパソコンで歌や詩を書
きエッセイ綴る

終戦ゆ八十年過ぎしこの夏はルソンの父を
しきりに想う

戦争の悲惨さ酷さを伝えんと壇上に立つ遺

児なる吾は

戦争遺児の作者が思いのままを素直に詠つ
て心情が逆る。戦争に翻弄された人々の苦悩
と平和への希求を当事者として語り継ぐ活動
は重く尊い。そんな思いを伝える手段として
の短歌の持つ力に強く胸打たれた。

「友」

今年またこれが最後と来る賀状律気な友の
老いを笑えず

「呼び出しの声で君だと判つたよ」わが腕

掴む友は白杖

アルバムに重なりあつて早や傘寿君は十五
の頃是なきまま

文字並べ指折り数え推敲し脳かき回しこと
ばで遊ぶ

初めての詩が地元紙に拾われて泥鱈さがし
の投稿つづく

昔は晴耕雨読であつたが、今は異常気象
の猛暑から逃れる日々となつてしまつた。
「脳かき回し」や「泥鱈さがし」など諧謔的
な言い回しが印象的だが、凡俗と諸刃の剣の
危うさもあるかと。奔放な日常が素直に詠わ
れていて、飄々とした作者が目に浮かぶ。

「家」

リフォームを繰り返しつつ七十年昭和染み

入るこの家に住む

子の夢に縛りかけまじ時折に帰省すること
喜びとせん

代替りして繋がつていく家の様子を淡々と
詠つてはいる。昭和を生きてきた夫婦が、子供
の夢と継承されない「家」の狭間で揺れる諦
念と寂寥の心情がしみじみと伝わる。

「秋に傾く」

角を曲がり子は去り行けりそれまでを振り
合ひし手に降りる静けさ

三分を計り終えたる水時計はからぬ時間を
まといて佇む

「手に降りる静けさ」や「時間をまとい
て」の表現に巧みな工夫が感じられる。

俳句

「梅雨明け」

自らしく生きるとはなに梅雨が来る前に

縮毛矯正をする

嘘をつくわけじやないけど本当のことは言

わない水色の傘

繊細な若さが奇を衒わずに表現されてい

る。

三回目の選評、改めて自分自身が俳句を学
ぶ機会をいただき、深謝致します。

○最優秀賞

「豊饒」

海山のあはひの棚田耕せり

田の中に代々の墓稻穂波

出羽富士は雲を豊かに今年米

故郷の稻作文化と豊かな実りを四季を通し
て謳い上げ、その中に自然や先祖への崇敬、
踊、帰省、新米、新酒等を点描。

○奨励賞

「仁王尊」

筋骨の締まる仁王や寒の寺

皺深き仁王の眉間大寒波

一題に七句を厳しく統率。しかも、筋骨に
寒、皺に寒波、雷鳴と力瘤等、仁王とその他



選評

佐藤茂樹

の事象の間には剃刀一枚の隙間もない。

「村の未来図」

門火焚く下駄の音なら父であり

盆三日棄田の草に立ち止まる

盆の月村の未来図探しおり

人や店舗の少なくなつた地域でも、門火の

習慣は続けられ、耕作放棄地を眺めつつ、将

来の村の未来図を描いている明日への光明。

「掛唄」

葺き替えの奥宮光る豊の秋

掛唄の朝霧晴れて勝名乗り

最初に奥宮、幟、荒格子等、物理的な描写

をしつつ、少女の眉、朝霧等あたかも一眼レ

フの交換レンズのごとく自在な視覚を展開。

○入選

「浜の村」

沖暗し吹雪まみれの登校児

百万遍の鉢の音凍つる浜の村

出稼ぎの父の文読む寒夜かな

厳寒の浜の村を描写。家屋を囲む風除け、
登校児、鉢の音等、情景は勿論、行間から音

さえも流れ出てきて臨場感がある。

「全校登山」

しんがりをつとめ全校登山かな

父と子の教師の道や茄子の花

親子二代の教師。しんがりを務めたのは亡

き夫か、次の句で子供さんも同じ道を選ばれ

たことを知らせる。親子一世代の境涯句。

「弥勒菩薩」

疇のこゑのみ今朝の弥勒佛

弥勒菩薩月の光に濡れ今宵

主題である弥勒菩薩を、四季を通じてバラ

ンス良く表現。月光等の取合せが詩情豊か。

「萬固山にて」

御靈屋の赤き唐破風綠さす

白亜なる仏舎利塔や蟬しぐれ

登山の状況を大樹、夏燕、唐破風、山門、

蟬しぐれ等、多角的な視点で表現。

○入選

「母逝く日」

あたたかやさしいなことも褒めし母

花の屋車椅子より母立たす

更衣母の好みを揃へけり

何でも褒める母の比類なき優しさを思い出

し、次は車椅子より立たせて母を自分が褒め

る場面、更には更衣等、ささいな日常をかけ
がえのないものとして思い出している。

「余生」

あらためて帰郷のこち駅風鈴

薬得てその数多し盆用意

駅の風鈴に帰郷の日を思い出し、西日が貫

く家、日常の薬の準備や盆用意など、二人の

かけがえのない穏やか日々。

「雪国に住む」

誰も来ず何処にも行かず四日かな

猛吹雪裂きてピンクのこまち号

子供さんの家族も去り、四日からは又、静

寂を取り戻す。最後の句はこまち号を活写。

「いにしへ」

ことのほか小さき土偶や青葉木苑

この石はかつて鎌か月冴ゆる

古代の人々の生活を思う時、悠久の月がマ

ッチ。マクロや望遠など視覚も多彩。

○グリーン賞

「秋田の秋」

盆休み俺は「帰る」で君は「行く」

新鮮で斬新的表現。俳句的な素養が加わつ

ても、独自の素材と表現を堅持してほしい。

俳人協会秋田県支部副支部長兼事務局長
香雨同人 同矢羽句会会員

選評



泉屋 おさむ

富士は、今年の豊饒を約束してくれている。

奨励賞 「仁王尊」

皺深き仁王の眉間大寒波

葺き替えの奥宮光る豊の秋
老杉の奥の掛唄霧襖

春風や忿怒緩めぬ仁王尊
雷鳴や昂る仁王の力瘤

入選された作品と惜しくも入選を逃した作品とは本当に僅かの差であった。芭蕉は「句調（くとのわ）ずんば舌頭千転せよ」といつたそうです。一句の調子が悪いときは何度も口ずさんで直しなさいとの教えと理解している。俳句は十七音しかない最も短い形の詩です。一字の助詞の選択によって俳句の出来に違いが出てしまいます。

前回同様、選句は自身の俳句の創作につながることと思い、応募された作品の一句一句に向き合い選をさせていただいた。



六郷（美郷町）の掛唄大会であろうか。荷方節に乗せて二人の唄い手が句の話題を取り込み、当意即妙な掛け合いを演じている様子

仁王像は、仏教寺院の門の前に立ち、仏法を守る役目を担う守護神といわれる。右側が阿形。左側が吽形。「仏教の阿吽の呼吸」の考え方由来し、「始まりと終わり」を意味し、宇宙の調和や生命の流れを表していると

いう。この俳句、七句とも季語と季語以外の措辞との調和が見事である。

入選 「浜の村」

盆三日稲田の草に立ち止まる
百万遍の鉦の音凍つる浜の村

入選 「全校登山」

魂迎へ相談ごとの二つほど
半跏坐の弥勒菩薩の清和かな

入選 「萬固山にて」

半跏坐の弥勒菩薩の清和かな
握る手に温み移さむ冬來たる

入選 「母逝く日」

御靈屋の赤き唐破風緑さす
入選 「余生」

あらためて帰郷のこち駅風鈴
猛吹雪裂きてピンクのこまち号

出羽富士は雲を豊かに今年米
七句とも調べが良く、しかも句意が素直に

読む者の心に届いてくる。「一重瞼の赤ん坊」は、天地の庇護を受け成長していく早苗

を思わせる。豊かな雲を浮かべた秀麗な出羽

入選 「掛唄」

入選 「いにしへ」

木の実落つ堅穴住居跡の穴

グリーン賞 「秋田の秋」

じいちゃんの節くれた手に赤とんぼ

子と共に品種改良精靈馬

独自の視点と素直な表現に魅力を感じた。

ぜひ俳句を作り続け、作つたら推敲を心掛け
るようにして欲しい。



選考寸感

加藤昭子

今年度は六十八名、四百七十六句の出会い
がありました。一句一句の背景、作者の思い
を取り込みながら選考に当たりました。有季
定型、季語の斡旋、発見、句意が伝わりやす
いか。又、原稿の書き方、誤字、脱字、文字
を直した後の処理など、最少の心配りが必要
ではないかと感じた選考でした。

最優秀賞 「豊饒」

秋田の豊かな風土性が、一句一句に感じら
れた句群である。題名の付け方にも、住み慣

れた土地への愛着が感じられ好感。

稻の花一重瞼の赤ん坊

稻の花の甘い匂いと、丸々と肥えた赤ん坊
の取り合せが良い。

田の中に代々の墓稻穂波

秋田では良く見掛ける風景。代々からの土
地を大切に守り、豊かな稻田の広がりが誇り
と感じさせる。

田の神へ産土神へ新走

収穫の有り難さが表出されている。稻刈り
を終えた喜びと感謝の念。

奨励賞 「仁王尊」

全句、名詞止め。格調高く、手堅い句の形

に仁王尊の姿が見えて来る。

筋骨の締まる仁王や寒の寺

季語の据え方で、仁王像の姿が厳格に、よ
り締まつた体型として迫る。

皺深き仁王の眉間大寒波

仁王尊の彫り深い形相は、大寒波をものと
もせぬ威厳があり、そこに暮らす人々を守つ
てくれているという思いが見える。

奨励賞 「村の未来図」

平凡な日常の営み、秋田県ならではの現状
を愁う。柔らかな言葉の隙間に哀感を見る。

草の市スーパーの無い村に棲む
家族が集まる盆、草の市で品物を買ひなが

ら思う村の将来。下五の漢字の据え方に、あ
きらめと、このままこの地で暮らして行くと
いう気概が重なつて見える。

パブリカに近づく村の隙間かな

パブリカの赤・黄色の明るい畠に佇つ。老
いて行く村の田畠を眺め、にぎやかだった頃
に思いを馳せる作者が見える。

奨励賞 「掛唄」

歴史ある行事、掛唄に対する愛着が見える
句群である。

陣立のごと幟立つ秋祭り

掛唄会場に立つ幟の多さ、伝統を守る人々
の気負いの数であろう。

掛唄に挑む少女の眉清し

若者に引き継がれて行く掛唄、見守る作者
の目差しが暖かい。

入選より一句ずつ引く

百万遍の鉦の音凍つる浜の村

海辺の暮らし、一昔前の風景を思い出して
いる作者。

しがりをつとめ全校登山かな
生徒達を見守る目差し、事故なく終わるよ

うにと祈りながら登つて行く。

弥勒佛へ一筋のみち冬ぬくし

堂に続く雪の道、信仰の道も足跡も一筋。

床下をぬける涼風萬固山

堂の床下を風が吹き抜ける。心も身体もほ

ぐれて行くひととき。涼しさが伝わる。

あたたかやさしいなことも褒めし母

長生の母に対する思い。いつまでも残る思

慕が胸を打つ。

あらためて帰郷のこち駅風鈴

ふるさとの駅に降りて聴く風鈴の音。ノス

タルジーを感じる。

猛吹雪裂きてピンクのこまち号

秋田ならでは。こまち号の鮮やかさ。

木の実落つ堅穴住居跡の穴

遺跡を巡つての景、昔に心通わせる作者。

グリーン賞「秋田の秋」

子と共に品種改良精靈馬

面白いなあと思つた。精靈馬の品種改良は
茄子から何になるかな。感性の鋭さ。どんどん
作句してもらいたい。

川柳

選評



山崎如醉

「あきたの文芸」の選者として三期目を迎えた。この間応募数は、四十七句四十三句

三十六句と減少の一途を辿つてることが残念でならない。投句数が少ないので、これまで投句していたベテラン勢が何らかの理由で止めたのではないかと思われた。そう思つた理由は、入賞枠に入る句が少なかつたからだ。従つて、今回は多数ある入賞候補句から

入賞句を選ぶのではなく、どうやつて入賞句にするのかという選び方であつた。敢えて厳しい言い方をすれば、以前よりは低レベルの選だつたので選評にも難儀した。入賞枠は五七句の指定であつたが、選者で話し合い枠

いっぱいの七句を入賞句とした。結果的に自分が候補とした句は五句入賞した。

選者三名が一致した最優秀賞ではないが、合点の結果の最優秀賞である。上五と下五の対比がいい意味で目立つ句があり評価した。発想としては

「地雷原一飛びしたる黒揚羽」の句が好きだ。ただ上五「地雷原」と下五

「黒揚羽」は、入れ替えても同じ意味と捉えられることからもう一工夫欲しかつた。

奨励賞「春を知る」

控え目な春も見えてくる。

「ふりかざすものがなくとも生きられる」この句の裏には、戦争を否定するものが潜んでいるのでなかろうか。最後の句、ここに秋の「一房のぶどう」の句を持つてきたのは何故だろうか。知りたい。

奨励賞「挽夏」

自分の周囲、身近な場面をよく観察していることが、列挙されている「出目金」「蟬」「蜃顔」「団扇」「西瓜」などから判る。ベ

テランの句だと思う。自分がトップに選んだ句だ。

「いつまでも沖を見ている夏帽子」で、過ぎ去る夏を惜しんでいる様子が解り、この句で締めたのが良かった。

最優秀賞「迷界吉祥」

奨励賞「続編をつづる」

過去も少し織り交ぜ、前へ進む姿が見えてくる。

「新しい櫂でのり出す次の章」

で、続編という題と通ずる。これらの句を読んだときに、最初の章はどんなんだろうという期待感を持たせた作りである。あつたとしたら是非読んでみたいものである。

入選「オノマトペ」

先ずは題の発想に感心した。更にオノマトペの対象となる下五が良かった。また「あきれた文芸」ではめずらしいユーモア句だったことも後押しした。但し、オノマトペという発想があつたからこそその入選だと思う。

入選「百歳と云う綾」

先ず百歳という年齢を詠んだということに入賞候補作品となつた。最初は百歳の人が詠んだ句なのかなと思つたりもしたが

「百歳を生き永らえた母の意地」

とあるのでそうでもないらしい。

入選「言葉」

言葉が乱れてきている時代。愛にも凶器にもなる言葉。そんな時に、言葉を大事にしている人に会えたことがうれしい。

「ひと言が生きる支えになりました」

で、今生きているあなたの姿を想像した。ただ残念なことは、「言葉より握り返した手の温み」は独立した一句としてはよいかもしれないが、この七句の中では浮いている感じがした。

入賞句以外で、自分が候補にしたのは「天と地」と「風に逢う」である。若い人がひとり投句を続けているようだ。昨年も言つたが是非吟社に入会し、川柳の基本というものを学んで貰いたい。

今回は、最後ということで手厳しい選評となつたが許して欲しい。

私自身も勉強をさせて貰つた三年間でした。ありがとうございました。

最優秀賞「迷界吉祥」

・戦場にそれは見事な二重虹
・焼け跡で遊ぶ子供の水鉄砲

・夕波がウインナ・ワルツを奏で居り
読み進めてまず、ウクライナ、ガザの痛ましい戦禍が浮かんだ。表題はあまり聞き慣れない言葉であるが、苦しみの中にも希望を見出す意と解釈した。その印象ある表題に倣つて上句、下句を効果的に対比させるなど、その独自性にも注目した。また、六句目までの体言止めも句群の座りを良くしている。掲句願いが込められている。



言葉のちから

伊藤光潮

第五八集は三十六篇二百五十二句の応募作品であつたが、それぞれの作品に対する作者の熱い思いをしつかりと受け止めるべく精読

奨励賞「春を知る」

・花を愛で人を愛して春を知る

し、再読を重ねた。選にあたつては、句意がしつかり表現されていること、そして発想、着想、表現力、句調、句の構成等をチエックポイントとした。また、前年の選評において、「あきたの文芸」は、題名を付けての七句連作であり、起承転結を意識して句を並べ全体を一篇の詩としての文芸性を持たせることが大切と記したが、その文芸性についても大きな評価ポイントとした。

・人というかたちで水になる水

人間としての自らの成長、心の変化を巧みにレトリックで詠み上げている。表題の「春を知る」は承の句からの引用であるが、その意は世の中、人の温みであろうか。掲句「人というかたちで」は句群の柱となつており、この一句からだけでも句意が伝わつてくる。

奨励賞「挽夏」

・出自金と夏の暑さを分かち合う

日常の情景を鋭い川柳感で切り取り、過ぎゆく夏への思いを心象、具象巧みな表現で詠んでいる。掲句「出自金と」の擬人化はその想がユニークである。また、終句の「夏帽子」は作者の思い出だろうか、心象風景が映しだされ余韻が残る。

奨励賞「続編をつづる」

・新しい櫂でのり出す次の章

・シナリオは三原色を搔き混ぜて

新たな章に漕ぎ出す作者の心情を、巧みな措辞で詠み込み、これまでの人生を踏まえての前向きな姿勢が伝わつてくる。掲句の「三原色」は喜び、悲しみ、希望の意と読んだがレトリックの巧みさに惹かれる。

入選「オノマトペ」

・ちやらちやらと安い男の独擅場

オノマトペを七句並べるという着想に注目した。いずれの句もひらがなでの擬声、擬態の表現としており、具体的イメージに効果を上げている。ただ、オノマトペに固執しているためか、句群に一体感がなく残念である。

入選「百歳と云う綾」

・百歳のカルテを生かし第二章

百歳という長い人生を生き抜き、この先も力強く生きるという母の偉大きさ、誇らしさを起承転結に七句を並べ表題を詠み込んでいく。掲句「百歳のカルテ」には作者の措辞の巧みさを感じる。

入選「言葉」

・何気ない言葉が時に心打つ

言葉が人に与える計り知れない力というものを飾らない平明な表現で詠んでおり、その句意が明確に伝わつてくる。日常に潜む何気ないことばの輝きを作者の川柳眼は見逃していない。

地雷原一飛びしたる黒揚羽

生と死、美と恐怖の対照が鋭い。「一飛びしたる」という自然な動詞の選択が、緊張の場に一瞬の生命の自由を感じさせます。

夕波がワインナ・ワルツを奏で居り

戦や死の影が消え、最後に訪れるのは調和と音楽。夕波とワインナ・ワルツという取り合せが、自然のリズムと人間の文化を融合させています。

う置き換えて読者に届けるか、改めて考えさせられながらの選でもあった。

川柳銀の笛吟社同人

秋田市住



川柳を
楽しみながら

近藤たつお

最優秀賞「迷界吉祥」

戦場にそれは見事な二重虹

荒廃と破壊の象徴である「戦場」に、自然の奇跡である「二重虹」がかかる。戦争の現実と自然の美しさとの対比が鮮烈です。

※戦争という重い主題に自然、季節、美の要素が見事に同居していて、一連の詩編のように読みました。「人間は絶望の中でも美を見出す」というテーマで貫かれているように思います。

奨励賞「春を知る」

ふる里のあちらこちらに秘密基地

子ども時代の無限の想像力と自由があふれています。「あちらこちらに」という緩やかな言い回しが、懐かしい原風景を包み込むよう柔らかい。誰の心にもある「帰る場所」を呼び覚みます。

ふりかざすものがなくとも生きられる

力や権威、信条といった「振りかざすもの」を手放しても、人は生きてゆける……。

そんな内的自由をうたいます。

※前半で「原風景」と「無垢の心」を描き、後半に「悟り」と「融解」、そして「調和」へと至る。「生きるとは、かたちを変えながら愛をすること」……。そんな普遍的メッセージを柔らかく伝えてくれる作品群です。

この角を曲がれば過去はもう喜劇

奨励賞「晩夏」

出目金と夏の暑さを分かち合つ
金魚鉢の出目金と、作者が同じ暑さを感じている情景。人と魚、室内と外界、暑さを通してつながる小さな連帯感が温かい。夏の中にも、静かな友情が感じられます。

いつまでも沖を見ている夏帽子

人の気配を残して置かれた夏帽子。誰かへの想い、去りゆく夏への惜別が漂います。まるで映画のラストシーンのような静謐さをたたえています。

※連作として読むと「夏という時間」を生き抜く人間の姿が見えてきます。どの句も、感傷に沈まず、穏やかなユーモアと写実の力で支えられているのが見事です。

奨励賞「続編をつづる」

シナリオは三原色を搔き混せて

人生の設計図を、自らの手で描こうとする姿勢。三原色は希望・情熱・理性、あるいは過去・現在・未来を象徴するよう。「搔き混ぜて」という軽やかな動詞が、創造的な混沌を生きるエネルギーを感じさせます。

人生の転換点を軽やかに描いています。

「この角を曲がれば」過去の悲劇を笑える日が来る……。それは成熟の証。ユーモアと救いに満ちた句です。

※この七句は「人生の再出発」を描く詩的ドキュメントのように読みます。希望・挫折・再生という流れを、繊細な比喩と明快な語感で紡いだ、まさに人生の章立て、そのもので

す。
県内の川柳人口から思うに応募件数が少なすぎることに、何とも言えぬ淋しさを感じました。川柳愛好家として、責任を感じなければならぬのかもしれません。そして、各吟社の協力をお願いしたいと思いました。

応募された方は沢山の句を作り、推敲を重ねながら七句に絞る作業をされたことと想います。自分の句の最初の読者は自分自身であり、七句に絞るのも自分自身です。応募までの学びは多岐に渡り深いものがあるように思います。是非多くの川柳愛好家の方々に来年度以降の応募をお奨めしたいと思います。

能代川柳社同人

エツセイ

三年目の選評

渡辺 修

最優秀賞の「お見送り、そしてお出迎え」は、一読して書き慣れた人の文章だと分かれる。思わず微笑んでしまう表現も、肩の力が抜けているから滑らない。実際にこなれた文章だ。

作者より十歳年上（八十七歳）の妻は元劇団員で、高齢だがすこぶる元気で活動的な人物だ。彼女はある朗読会の公演を大成功させ、新聞でも大きく取り上げられる。興奮冷めやらずに喜ぶ妻の姿を、同じ元役者の作者は暖かい目で見守る。車の送迎や食事の用意など、舞台の裏方のように支えているのだ。

一見すると明るい話に思えるが、同時に、この穏やかな日々がいつかは終わるという覚悟や、迫りくる老いの足音もさなりと語られている。だからこそ、今が愛おしいのだ。

この重層的な構造が、作品を味わい深いも

のにしている。題名の「お見送り」と「お出迎え」に意図的なものを感じるのは、穿ち過ぎだろうか。

そして、最後の作者の言葉は、最高の愛の告白だということも、指摘しておきたい。

奨励賞の「糸」は、木都能代の盛衰と、旧料亭「金勇」を紹介する作品である。

端正で無駄のない文章が実に心地よく、限られた枚数の中で、能代の歴史や金勇の魅力が分かりやすくまとめられている。

ただし、ボランティアガイドの経験を踏まえた、金勇への思いを語る後半になると、またとまりに欠け、歯切れが悪くなる。題名の「糸」も適切だったかどうか疑問。書き出しと締めの文章が、糸に縛られて窮屈そうだ。

もう一つの奨励賞「バスを買う」は、神奈川県の観光業者で不要になつたバスを、作者の父が一万円で買ってきて、それを巡るさまざまな事件が語られる、楽しい作品だ。

県南の農村の爽やかな風景や、のどかな雰囲気がうまく描かれていて読後感がよい。

作者の友人の役割が中途半端なことや、説明が後出しになる箇所が気になる。書き出す前に、話の組み立て（構成）を十分に練つて

いれば、もつとよくなつたはずだ。

入選となつた「愛猫の記」は、イヌ派を自認する作者が、偶然にも仔猫を飼うことになり、がらりと変わつていく生活や心情が、表現豊かに語られている作品。

文章力が高く、表現に工夫を凝らしていることがよく伝わつてくる。ただし、その苦心も度が過ぎると裏目に出る場合がある。あえて平易な描写を選ぶ勇気も必要だろう。

惜しくも選には入らなかつたが、「あの日、デパートで」は個人的に高く評価している。また「成田家失格」、「私のカラス事情」の二作も、それぞれ光るものがあつて印象に残つた。是非次回も頑張つてほしい。

また、今回は魅力的な題材であるのに、作品としてまとめる技術が追いついていない、実にもつたない作品が目立つた。

「セイタロノバカロー」、「『土崎魚問屋』あつたこと」、「曾祖父『三四郎』」、

「落語と私」がそれに当たる。特に「落語と私」は、いつそ小説にした方がよかつたかもしれない。それくらい稀有な経験であり、エツセイ部門の字数で書けという方が無理というものだ。

グリーン賞の「ダイナミックお散歩」は、帰省していた大学の友人を盛岡まで迎えにいふ話。友人との絆が「忍び駒」（お守り）に象徴され、彼女との新たな物語が、これからも紡がれていくのだろうと予感させる。

澁淵とした勢いのある文章で、技術的には未熟だが、読後感は不思議に悪くない。文章は書けば書くほど上手くなる。どうか書き続けてもらいたい。

私の担当は今年度で最後となるが、そこで最優秀賞を選出できたのは大きな喜びである。多くの作品応募者の方々、ともに議論を交わした選考委員の各先生、そして裏方として汗をかいてくれた県職員の皆さんに、心からの感謝を捧げたい。

寸感

菅 原 敏 紀



『あきたの文芸』は六十年近い歳月、県民の創作意欲の高揚と文芸活動の普及・振興を

図ることを目的に文芸作品を公募し、優秀作品を掲載、刊行し続けてきました。今回、あきた県民文化芸術祭二〇一五「あきたの文芸」エッセイ部門で受賞された五名の方々には心から祝意を表します。

ところで、エッセイとはそもそも何でしょう。定義はいろいろあります。端的に言えば、個人の体験や読書などから得た知見をもとに、感想や思索（思想）を綴つた文章であり、その意味ではプロ、アマ問わず万人に開かれた文学ジャンルなのです。

もつとも、万人に開かれてることと、読者が作品を受け入れるかは別問題です。エッセイを読んだ方であれば、何を言いたいのかよくわからない、何かもう一つしつくりこない作品に出会った経験は一度ならずあると思います。では、内容を平易にすれば読者に受け入れられ、難解ならそつぽを向かれるかと言えば、物事はそう単純にはいきません。難解な内容であっても、読者に受け入れられるエッセイはたくさんあります。受け入れられるかどうかは、実際のところ作者がどれだけ

他者の視点（客観性）を欠いたエッセイはどうなるでしょう。誰一人共感できない個人の感想が延々と綴られた文章や、一体誰に向けて言っているのかわからない見解が羅列された文章……。それを持て余す読者の姿が容易に想像できます。

要は、書いていく中で読者に伝わらないのではと感じた時、表現を書き改めるなり、内容を書き加えるなりする気持ちを持つてかどうかなのです。これは何もエッセイに限った話ではなく、日常生活における会話やコミュニケーション全般に通じると考えます。今回、応募作品全てを読み終えた時に感じたことはまさにこの点です。エッセイは何も特別なものではありません。日常のコミュニケーション同様、作者と読者との間には、血の通つたやり取りが必要なのです。

それでは受賞五作品について述べます。

「お見送り、そしてお出迎え」は、最優秀賞に相応しいテーマ、内容、構成でした。終わり方も湿り気がなく、何よりも読み終えた後、爽やかな心地よさが残りました。

『糸』は木都と称された能代の変遷、金勇の誕生と現在を丁寧に綴つ

た作品。もう一つの「バスを買う」は、映像化されてもおかしくないような実に魅力的な題材を扱った作品。ただ二作品とも奨励賞以上とするには、題材の処理の仕方や構成などの欠点がありました。

入選の「愛猫の記」は、題材、文章もいいのですが、わかる人にはわかるといった表現が散見された点が惜しまれます。趣味嗜好を共にする専門文芸誌であれば一席でもいいと思うのですが……。

グリーン賞の「ダイナミックお散歩」は、身辺事象にまつわるエッセイとしては、今回の応募作品の中でよく書いている方ですが、説明が不親切なのと題名の安直さが気になりました。ただ、一読して若い方の作品とわかれ、瑞々しく、物怖じしない感性はグリーン賞に値すると感じました。

検討している方々に少しでも参考になれば幸いです。以下、入賞作として選ばれた作品にコメントし、また終わりでは入賞を逃した作品についても触れています。

「お見送り、そしてお出迎え」

高齢夫婦の日常が軽やかな筆致で明るく前向きに描かれており、読後感がよかつたです。タイトルから暗い内容かと思われました

が、「見送り」は「死」を想起させるので)、読むと希望や活力に満ちていました。

かつて街に根づいていた木の文化、その歴史や関連する建物等、とても読みやすく書かれていました。押しつけがましい語り口はありません。おそらく多くの読者が十分知らなかであろう情報が淡々と書かれていますが、疲れを覚えず読むことができます。それはこのエッセイが優れているからでしょう。落ち着いた筆致が評価されたと思います。

「バスを買う」

タイトルのとおり、バスを買うとどうなるのかという興味関心をくすぐる内容で、タイトルに負けず最後までおもしろく読むことができました。セリフが複数あり、時折それらを誰が発しているのかがわかりづらかったところもありましたが、そうした細部の不十分な点を補うほどの内容が評価されました。

「愛猫の記」

飼い猫のことを書くのもなんとありふれたことかと思われるかもしれません、文章力の高さ、巧みな構成によつて力作に仕上がっていました。何気ない日常に緊張感のある展開を織り込み、読み手を惹きつけて離さない

初めての選考

畠山 研

初めて選考委員を務めることになりました。応募くださった皆さんやこれから応募を

「系」

ところ、玄人の筆致が光つており、個人的に
は一番評価したエッセイでした。にくいとま
で感じられるその技巧はやや目立ちすぎると
いう印象も残すかもしれません、本作に注
がれた熱意と手間は明らかであり、ほかの作
品より一步抜きん出ていました。

「ダイナミックお散歩」

読んでいて、まるで自分自身も秋田をはじめとする東北の地を旅する（あるいは「お散歩」する）ような感覚を覚えました。気の合う友がいることが羨ましく感じられるエッセイでした。「インスタントカメラ」等の道具も粹です。「友だち」にこの入賞をどう報告するか、どんな方法でこの友をまた驚かせるだろうか、想像も膨らみました。

以下、入賞を逃したエッセイについても書
かせていただきます。選考中、最も多く飛び
交った言葉は「惜しい」と「もつたいない」
でした。タイトルは素晴らしいが、内容がそ
れに追いついていない（あるいはその逆の）
もの、出だしや結びの工夫があとわずか足り
ないもの、一つのエッセイ中に話題が複数あ

り絞り込めば化けたであろうもの。読んでい
てどれも忘れられないエッセイばかりでした。ぜひ書き直した上でまたご応募いただき
たいです。応募にあたつて気をつけるべきこ
とは過去の選評でも十分指摘されているよう
でしたのでここでは控えるとし、また次のエ
ッセイを拝読させていただくことを楽しみに
しています。

あきた県民文化芸術祭2025 「あきたの文芸」 応募状況

1 部門別（以下、数値は応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
R7年度	11	33	46	68	36	23	217
R6年度	10	25	58	69	43	20	225
R5年度	11	28	56	77	47	22	241
R4年度	9	32	61	77	39	24	242
R3年度	14	38	55	78	45	25	255

2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳		エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
R7年度	7	4	17	16	19	27	42	26	21	15	15	8	121	96
R6年度	6	4	13	12	27	31	41	28	26	17	8	12	121	104
R5年度	7	4	9	19	22	34	44	33	27	20	6	16	115	126
R4年度	7	2	13	19	24	37	39	38	25	14	12	12	120	122
R3年度	9	5	13	25	20	35	44	34	31	14	13	12	130	125

3 年代別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	100代	不明	総数
R7年度	24	9	5	4	9	27	57	65	17	0	0	217
R6年度	18	7	3	7	11	29	75	63	11	1	0	225
R5年度	20	9	1	10	9	38	81	65	8	0	0	241
R4年度	18	4	2	8	13	44	85	63	5	0	0	242
R3年度	11	6	3	10	21	51	77	68	7	0	1	255

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
小説・評論	4	1	2	0	1	1	0	1	1
詩	12	3	0	0	1	7	6	3	1
短歌	3	2	2	0	2	4	9	20	4
俳句	4	1	1	4	1	6	23	19	9
川柳	1	0	0	0	1	4	12	16	2
エッセイ	0	2	0	0	3	5	7	6	0

4 新旧割合

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	4	20	32	49	32	18	155
新	7	13	14	19	4	5	62
計	11	33	46	68	36	23	217

再…以前にも応募したことがある方の作品数

新…今回初めて応募した方の作品数

5 月別応募数

6月	7月	8月	計
17	26	174	217

あきたの文芸

昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第五十七集（令和六年度）応募一百三十五作品

・小説・評論部門

最優秀賞

坂本 愛子

「二〇五〇年 東北州 由利支庁」

「キチジョウソウ」

「チチ活」

「君の歌」

「デジタル世界」

「なにわ梅」

「キチジョウソウ」

「デジタル世界」

「なにわ梅」

・詩部門

奨励賞

鈴木 敏男

「キチジョウソウ」

「デジタル世界」

「なにわ梅」

・短歌部門

奨励賞

鈴木 敏男

「キチジョウソウ」

「デジタル世界」

「なにわ梅」

・俳句部門

奨励賞

佐々木 鏡子

「亡夫のワイシャツ」

「盆帰り」

「なにわ梅」

「キチジョウソウ」

「デジタル世界」

「なにわ梅」

・川柳部門

奨励賞

佐々木 鏡子

「古稀のほとり」

「羽黒山」

「窓から」

「玄武」

「あれから」

「刹那を生きる」

「羽化の序章」

・エッセイ部門

奨励賞
最優秀賞

白高 桥浦 文子

「母」

「螢光管にアボ」

「母のおはぎ」

編集後記

◎あきた県民文化芸術祭2025「あきたの文芸」入賞作品集『あきたの文芸第五十八集』を刊行しました。

この作品集は、十五歳から九十四歳にわたる応募者からの作品二百十七編より、最優秀賞五編、奨励賞十四編、入選十九編、二十五歳以下の文芸活動を応援するグリーン賞五編、計四十三編を掲載しております。

◎この事業は、あきた県民文化芸術祭2025の一環として実施しております。応募いただいた皆様をはじめ、文芸団体や広報協力をしてくれた各市町村、報道機関、図書館などの文化施設、さらには、事前審査から選考・校正まで多大なる御協力をいただいた選考委員の皆様に深く感謝申し上げます。

◎「あきたの文芸」は、今後もより読みやすく親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、一層充実させていきたいと思つております。

あきたの文芸第五十八集

あきた県民文化芸術祭2025
「あきたの文芸」入賞作品集

令和七年十一月十四日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話○一八一八六〇一一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

印刷・製本 株式会社大潟印刷

